改新女子國文

巻四

375.9
Ha 7
資料室

42271
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
64986

資料室

文部省檢定濟
昭和五年四月五日 高等女學校國語科用

文學博士 芳賀矢一 編
文學士 橋本進吉 訂補

改新女子國文

東京 合資會社 冨山房 發兌

広島大学 教 64986 図書

3759
Ha 7

配所の菅公

北野天神繪卷

改新女子國文　卷四　目次

一　日章旗……中西悟堂……一
二　爽かな心……河野省三……四
三　歌の境地……木下利玄……一五
　動かぬ表現（自修文）……五十嵐力……二四
四　新聞の知識……小野賢一郎……三〇
五　知らぬ世界……加藤武雄……四八
六　秋の讃美……上司小劍……五六
七　宮島にて……有本芳水……六二

八　土器賣る翁……柳澤淇園…六四
心の洗濯（自修文）……柴田鳩翁…六六
九　配所の菅公……七一
一〇　菅公の夫人……山田新一郎…七五
一一　夜の世界……三木露風…八四
一二　感慨多き角板山……幣原坦…八六
臺灣の蕃人と暮した話（自修文）……小泉鐵…一〇〇
一三　落葉……島崎藤村…一〇八
一四　小さい旅人……薄田泣菫…一一三
一五　水郷の黎明……北原白秋…一一三
一六　田園の曙……白鳥省吾…一二〇

一七　努力と奮闘と嗜好……幸田露伴…一二三
一八　近江聖人の幼時……村井弦齋…一三七
一九　新年雜記……正岡子規…一四七
猫と雜煮餅（自修文）……夏目漱石…一五〇
二〇　家の紋……一五七
二一　朗詠……一六〇
二二　靜かな春……生田春月…一六三
犬ころ（自修文）……二葉亭四迷…一六九
二三　多摩御陵參拜の記……九條武子…一七五
二四　哲人聖徳皇太子……高島米峰…一八四
二五　國史に返れ……德富蘇峰…一九一

二六　明倫歌集より……………………………………一六六

改新女子國文　巻四

一　日章旗

中西悟堂[一]

秋日の朝の町を私は行く。
日章旗のひるがへる町を、
晴れ晴れしい祝日の町を、
私は心爽かに歩いて行く。
日章旗の何といふ純潔さ、
何といふ明朗さ。
私は祝日の國旗の美しさに心奪はれて、

(一)詩人。僧侶。明治二十八年金澤に生まれた。花巡禮・武藏野等の著がある。

意氣揚々として町を歩く。
町並のうしろに靡く青空、
青空にひるがへる日章旗、
何といふ博大な心を示し、
何といふ光明な心を表してゐるのだらう。
あゝ、晴れやかに麗しく、
日章旗は町にひるがへる
りうりうと流れる朝風にひるがへる。
私は日章旗が語る心を始めて知つた。
その光輝に心を奪はれ、
その單純さ正しさに心を奪はれ、
嬉々として爽かに、
朝の町を歩いて行く。

燦然
颯爽

光榮の旗よ。
譽の國旗よ。
あゝ、樹々の緑と青空と、
明るい人々等の顏々と、
燦然たる日章旗とに飾られた祝日の町を
感動に溢れ溢れて、
私は颯爽と歩いて行く。

——現代日本詩選——

(一)國文學者。國學院大學教授。明治十五年埼玉縣に生まれた。

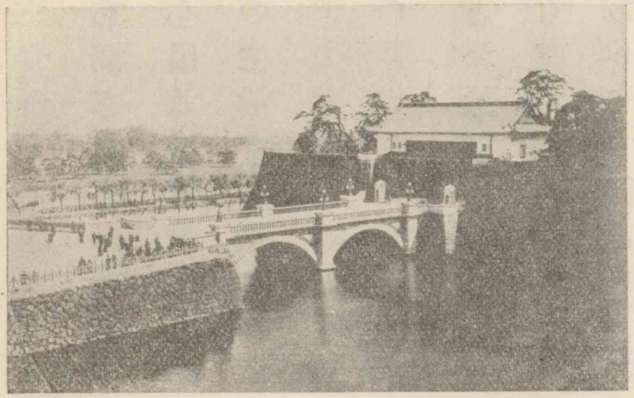
清淨

二 爽かな心

河野省三(一)

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴れ晴れしたみやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひらひらと飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な活き活きとした氣分が起つてくるのであります。或はまた明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿前に參りますと、自ら

清々しい尊い氣分につゝまれてくるのであります。更にまた松の緑の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御隆盛を思ひますると、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。



二重橋

これ等の神々しい清々しく、晴れ晴れしい心持こそ、實に我々日本人が、遠い遠い昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は、全く我

眞髓

が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち滿ちた心が、卽ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。明治天皇の御製に、

さしのほる朝日のごとく爽かに
持たまほしきは心なりけり

とお詠みあそばされてありますが、その爽かな心は、取りも直さずかやうな純にして直なる氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日毎日の生活を營むに當りましても、最も必要な氣分であり、且つ價値のある

屈託

態度は誠にこの爽かな心にあります。

この爽かな心は晴れ晴れしい廣い心持であります。徒に物に屈託しないゆつたりとした心であり、またみだりに他を排斥しない穩かな心であります。この心からして、かたよりのない爽かな氣分を味はふことができるのであります。

爽かな心は、明快な裏表のない心持であります。溫味のある生き生きとした生活は最も望ましい世の中であります。僞らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命もまたここにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽かな心の本體であります。

建設的

爽かな心はかく淸らかで溫味のある生き生きとした心持でありまして、建設的に有意義にすべてのものを生かしてゆくところの積極的精神であります。所謂「朝日の豐榮昇る」氣分が、卽ちこの爽かなる心の働であります。

我々日本人は、かういふ爽かな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形づくつて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、卽ちこの爽かなる心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の說がありますが、畢竟はこの爽かな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に伊勢國、松坂にあつて、當時の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長でありますが、その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はば
朝日に匂ふ山ざくら花

とありますが、この大和心も正しくこの爽かな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを說いた人であります。

さうしてひたすらに我が國家を愛する道を力強く主張した人であります。

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明く、淨く、直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はここにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽かな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を

經典

愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐることは明らかであります。神社は我が神道を形に生かした經典でありまして、彼の鳥居といひ、鎭守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお參りいたしますと、私たちの心は自ら清々しい爽かな氣分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流に、二千年の昔から鎭座まします皇大神宮に參りますと、何人も西行法師と同じやうに、

なにごとのおはしますかは知らねども
忝けなさに涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、卽ち日本人の神に對するありのままの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

淺みとり澄みわたりたる大空の
ひろきをおのか心ともかな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも淸らかに爽かな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。思へばもう十三年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それ

は明治天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向かつて祭壇を設け、ほどよく隔つたところに並びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に遲れた町民たちは、いづれも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて、伏拜みましたが、やがて徐ろに、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一

禮して立去つたのであります。これを目擊しました私は、誠に涙ぐましい感にうたれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活にうつしまして、物を淸らかにし、心を爽かにして、僞らざる力强い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽かな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なるところに一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

三　歌の境地

木下利玄(一)

土より出でのびんとしつゝ低くある
曼珠沙華(二)の蕾押し寄りあへり

日中には、まだきらきらと暑い日光も、午後になると黄赤色にしつとりと、地上に照つてゐて、樹木には長い夏を通した疲勞が見え田畑の穀物には、その稔を急いでゐる色が見える。

かういふやうな日が幾日か續くと、もう秋の彼岸になる。その前後に、畠の畔、岡の裾、墓原などに、簇り咲く曼珠沙華の眞赤な美しさ。私はあの花が大好きです。

(一)歌人、子爵岡山縣の人、大正十四年歿、年四十四。銀、紅玉、李青集等の著がある。

(二)ひがんばな。山野自生の多年生草本、花は深紅色で有毒植物。

炎威
毒々しい
(一) Sentimental.
(二) Cream.

その紅のそつくり返つた花瓣は、まだ炎威を殘してゐる秋陽に照映えて、毒々しいまでに燃えてゐるそれが夕方村を通り過ぎたりして、路傍の小高い丘の、日露戰役の戰死者の墓の所などにかたまつて咲いてゐるのを見かけると、赤い夕日に照らされてといふセンティメンタル(一)な唱歌の節などが思ひ合はされて、不思議な淋しさを人の心に投げかける。

あの花の蕾のかたまり合つて、秋の濕つた黑土から、頭を擡げてくる可憐さよ。あいつは、柔かい半透明なクリー(二)ム色の極くうぶな、みづみづしい色をしてゐて、一團の球根から出たと思はれる五六本が一日二日のうちに丈を

聯想
奔流

のばしててつぺんに咲出るのだ。

あの花を見ると、彼岸の寺詣りとか、萩の餅とかいふものを聯想して、日本の年中行事に對する慕はしさを感ずるのを常とする。

山川に渡せる橋にあたる日を
踏みわたりけり向うの岸へ

片山里の溫泉場の朝、自分は宿を出て傍を流れてゐる山川の岸へ行つて見た。山の方から奔流してくる谷川が、この邊では可なり廣い川幅になつてはゐるが、なほ淺いところが多く、石の上を越えて、綺麗な水が、後から後からと音を立てて瀨をつくつてゐる。

たわわに

新秋の日光は、普く山川にも好意を示してゐて、この流の底の石まで照透つてゐる。朝は晝に向かつて時を移しつゝある。日光は次第にたける。見れば川向うにも、二三軒の百姓家があつて、その流の上に、板の橋が渡してある。それにも、朝日は親しくその肌について照つてゐる。自分はその板橋を踏んで見たくなつた。さうして板に目をおとしながら、我が影を流と板の上に映しつゝ渡つて見ると、いかにもその照つてゐる日を踏むといふ感じが自分のものに親しみ易い心を嬉しくさせた。たわわに搖れる橋の上で見ると、すぐ下に低くある瀬ともまた親密な關係に身を置いてゐることが好い氣持だつた。

たゆたふ

日のささぬ花屋の土間のつめたさに
小菊の束のおびたゞしもよ

往來の日蔭の側と日向の側とが、對ひ合つてゐることは、なかなか感じがあると思ふ。秋やゝ寒くなりかけた朝などは殊にさうである。

その往來を行きつつ、日蔭の方を見ると、そこに花屋があつて明るくない土間が、特別の冷やかさを感じさす。この花棚にある草の花、木の花が、その濕つた空氣の中に、秋花獨特の寂びた色を沈めてゐる。それを見ると人の足をたゆたはせる。

そのまた土間に、こは何といふ澤山な小菊の花や蕾だ

幽雅

洛北

(一)京都府愛宕郡大原村。

(二)比叡山。近江、山城の兩國に跨つてゐる。高さ八七〇メートル。

らう。紫白黃などの束が堆高く積重ねられてある。それの感じはなかなかよくて、小菊の特殊の美しさを表す一つの場合ともいひ得る。況やその空氣の中に流れ漂ふ菊の幽雅な、しかも浸透るやうな力のある匂が、人の嗅覺に迫つてくるに於てをや。花屋といふものが心にくくさへなる。

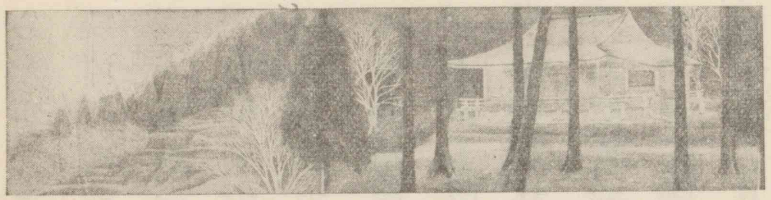
　　月夜になり晝間歩きし三里の道
　　　露けく明るし人力車にて歸る

洛北大原(一)に遊んだのは、秋もやゝ更けてのことだつた。京都の町を北にはづれて、自分は叡山(二)の峰つゞきを仰ぎつゝ幾つかの村里を過ぎて八瀬大橋を打渡り、一人步き

(一)天台宗。延暦寺の別所。

寂寞

(二)天台宗。大原村草生にある。



三千院（小林柯白筆）

の默り込んで、なほ北へ北へと步みをつゞけたが、なかなか大原へは行きつかなかつた。

大原はこの山間の奥の、殆ど峽といつてもいいくらゐの、狹い感じのするところであつた。紅葉の染めた、三千院(一)で案内を乞うて、境內の往生極樂院を見て、阿彌陀堂の寂寞に浸り、山本傳ひに寂光院(二)に廻つてゐるうちに、山家の習か、薄雲が日をかくして、時雨が降つて來た。庵室の障子をあけて大原の峽に時雨の降るのを見おろしてゐるう

ち、やがてまた時雨は過ぎて日が照つた。山の庵室の空氣の薄ら冷たさの、そぞろに淋しく、あの平家物語の大原御(一)幸を思ひ浮かべて、しやれた淋しさを樂しんだ。

そのうちに時が移つたので、京都への歸りを思ひ、傍らの丘上にある建禮門院(二)の御陵は、下から拜して大原の村に出た。釣瓶落しといふ秋の日のことだから、暮るるを急ぐといふ頃ほひになつた。

村で人力車があるかと問へば二人ゐると答へた。その一人は京都へ出て、一人の方がゐるだらうとのことで、ゐてくれればいいと念じつゝその家へ行つて見ると、裏の山へ薪とりに行つてゐるのを、家の娘が呼んで來てくれ

(一)文治二年の春、後白河法皇が寂光院に建禮門院をおたづねになつたこと。

(二)御陵は寂光院の後の翠黛山にある。建禮門院は高倉天皇の中宮。安德天皇の御母。御名は德子。建保元年（一八七三年）薨去、御年五十七。

た。その人力車に乘つて、晝間こつこつと歩みを運んだ白く乾いた街道を京都へ向かつた。日は全く暮れて月夜になつた。秋の夜霧が路傍の槇林や櫟林をこめてゐるのへ、時折風が濕やかなささやきをたてる傍を通り過ぎた。こんなところを通つたかしらと、車上から見返つたり仰いて月を見たり、車夫と話をしたりして京都の町へ近づいた。晝間歩いた三里の道が、月光の下に趣をかへて、しんみり寂びれてゐる中を、自分が往路とはまるで違がつて樂な車上から見おろして行くのが、いたく自分の興をひいたのであつた。

——李青集——

(一)國文學者。文學博士。早稻田大學教授。明治七年米澤市に生まれた。新文章講話。新國文學史。國歌の胎生及び發達。甲鳥園隨筆等の著がある。

巨魁　賊徒または一揆などのかしら。

(二)赤穗藩の家老。元祿十五年十二月十四日、同士四十六人と主君の讐吉良義央を討つた。翌年二月死を賜はつた。

自修文

動かぬ表現

(一)五十嵐　力

すべて物事の美しく感ぜられるのは、多くは、その物の美しい爲ではなくして、寧ろその物の在るべき所にあり、置かるべき所に置かれる爲である。例へば靨は頬にあれば愛嬌を添へるが、顬にあつては醜い。御飯は飯櫃、飯碗の中にあれば綺麗だが、吸物椀や菓子皿の中にあつては穢い。孔雀の羽は孔雀の身に着けば美しいが、烏の翼に挿んでは、ふさはしくない。文章もその通りで、例へば「巨魁」といふ語は立派な語であらうが、これを大石良雄の場合にあてはめて、「大石良雄は赤穗四十七士の巨魁(二)なり。」といつては落着かぬ。同じく「頭」といふことでも、學校には校長といひ、銀行には頭取といひ、博徒には親分といひ、大工には棟梁といひ、政黨には首領といひ、大臣には内閣總理大臣といふ。而してこれ等の語が如何に立派で上品でまたそれを組立てた文句が如何に精確で明瞭でも、その場その場に嵌まつた語を据ゑつけなければ滿足な文章とはいはれぬ。これが穩當といふことの非常に大切なる所以である。

更に一例を引いて、ここに「悔しい。」といふ感情をいひ表すとしよう。王朝の大宮人ならば「くち惜しうこそはべれ。」「殘りをしさの極みになむ。」などいふであらう。而してさういはねば、優美な大宮人の心持が現れぬであらう。德川時代の武士ならば「殘念至極でござる。」といふであらう。而してさういはねば武骨な封建武士の魂が現れぬであらう。今日の軍人ならば「實に遺憾ぢや。」といふであらう。而してさういはねば今の軍人の心持が現れぬであらう。妙齢の女子ならば「わたしくやしいわ。」といふであらう。舌のまはらぬ幼兒ならば「くやちいな、くやちいな。」と

穩當　物のすぢみちに合つて無理のないこと。

(一)俳人。蕉門十哲の一人。淡路國の人。寶永四年(二三六七年)歿、年五十四。
俳諧師　俳諧に巧な人。また俳諧を定業とする人。
(二)菅原道眞。

いふであらう。そしてさういはねば二者それぞれの心持が適當には現れぬであらう。もし妙齡の女子に「遺憾至極。」といはせ、武骨な軍人に「わたしくやしいわ。」といはせ、明治大正の人に「くち惜しうこそはべれ。」といはせ、平安朝、鎌倉時代の人に「ほんとにくやしう御座います。」といはせたならば、よしそれ等の語が一粒一粒にはいかに立派でも到底落着いた立派な文章とはいはれぬ。これが穩當といふことの文章に必要で、また作文道の目貫とも冠ともいはれる所以である。

(一)服部嵐雪といふ俳諧師が、謠曲「雷電」の一節を例にして、句を活かすには、いかにも適切で都合よくその場合にはまる事物を引いて來ねばならぬといふことを門下に敎へたことがある。「雷電」は、(二)菅丞相が筑紫の配所に薨ぜられて後、雷神となつて讒者の一類を亡ぼされるといふ筋を書いたもので、その中に、

梵天帝釋　共に佛法にていふ天上の神。

菅公の亡靈が比叡山延暦寺なる舊師の法性坊を訪はれた一節がある。月白き秋の夜半、法性坊が天下泰平の御祈に取りかからうとしてゐると、柴の戸をほとほとたゝく音がする。松風の聲か不思議やと、物の隙より見れば、さきに筑紫で果てられたといふ菅丞相であつた。驚きつゝも内に請じて、「御薨去の由承つて色々に弔ひ申したが、屆き候ふやらん。」と尋ねると、「われはこの世の人ではないが、切に賴み申したきことがあつて驚かした。われ梵天帝釋の憐を蒙り雷神となつて遠からず内裏に飛入り、われにつらかりし雲客たちを蹴殺さうと思ふ。その時は朝廷より必ず僧正を召さるゝであらう。かまへて御參りあるな。をり入つて願ひまゐらするは、このこと。」といはれると、僧正は「折角の御賴みなれば、宣旨はあつても一二度は參るまじ。」と答へらるる。丞相は重ねて「いや勅使たびたびに及ぶと

洒水の印を結ぶ ― 水もて火を消さする行法。
鑁字の明 ― 陀羅尼の名。

も必ず參內あるな。」と賴まるる、押問答の末、僧正はきつとなつて「王土に住めるこの身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか參內申さゞらん。」と答へられると、丞相の姿が見る見る變つて鬼のやうになり、

「折ふし本尊の御前に、柘榴をたむけ置きたるをおつ取つて嚙みくだき、妻戶にくわつと吐きかけ給へば、柘榴忽ち火焰となつて戶びらに、ぱつとぞ燃え上がる。僧正御覽じて、さわぐ氣色もましまさず、洒水の印を結んで、鑁字の明を稱へ給へば火焰は消ゆる煙の中に立ちかくれ丞相は、行方も知らず失せ給ふ。」

とある。嵐雪がいふに、ここに柘榴を用ひたのは動かぬ所である。腹の立つまゝ佛前にありある物を取つたといふところだから、一寸考へると蜜柑でも饅頭でもよささうなものだが、蜜柑や饅頭を嚙んだでは火にならぬ。柘榴の色が燃え立つやうに紅で、その外觀が破裂彈のやうに威勢よく彈けて居ればこそ、これを嚙んで吐けば火焰となるとも想像されるので、この場合、柘榴の外に使ふべきものがない。かやうな動かぬ材料、この場合これでなければならぬといふ材料、他の物で代理のできぬ材料を用ひたればこそ、この文が活躍してゐるのである。俳句に於てもこの用意が肝腎であるといふ風に說いてゐる。

いかなる事物でも、最も適切穩當にこれをいひ表し得る言葉は世界にたゞ一つだけしかない。このたつた一つの言葉を搜しあてて用ひること、これが文章に落着を與へる最も肝腎な要件で、文章の「みがき」「洗錬」「推敲」などいふのは、畢竟最適の一語を搜して用ひることに外ならぬ。

四　新聞の知識

小野賢一郎[一]

一

現代の新聞紙には、世の中がありのまゝに映る。きのふの世の中、けふの世の中、あすの世の中、それが美しければ美しく、醜ければ、新聞紙もまた醜いのである。

我々は何人も自分の世界を知りたい、自分自身の姿を知りたい、この本能的の要求が、有史以前から人類に鏡といふものを與へたが、新聞紙もまた、全く同じ意味をもつて發達し、隨つてその使命の第一義も、ここにある。

卽ち世の姿のうごき、社會相のうごきを、ニュース[二]とし

(一)俳人・東京日日新聞社會部長・明治二十一年福岡縣に生まれた。俳畫、陶器に嗜がある。著書は頗る多く、世界のぞ記。洋行茶話。陶器を試みる人。陶器を中心に。小説溝等はひろく讀まれてゐる。本文は特に本書の爲に執筆されたものである。

本能的の要求

第一義

社會相

(二)News.

て、正しく、速く、親切に、讀者に報ぜんとして、新聞社が必死の苦心をすることは、世相の鏡としての使命を完全に果さんとするに外ならぬ。讀者は、朝の新聞紙面、夕の新聞紙面、これ悉く、自分自身とその周圍との姿であることを忘れてはいけない。

二

新聞社は、編輯と印刷と營業とに大別される編輯局は記事をつくり、印刷局はこれを印刷し、營業局は、いかにしてこれを多くの讀者に與へんかといふ事務を掌る。この三部は、新聞社の經營に於て、いづれを一つ缺くこともできないが、使命の根源を果し、新聞社の眼であり耳である

のはいふまでもなく編輯局、卽ち「新聞記者」と稱されるものであつて、これがまた內勤記者と外勤記者とに別れる。

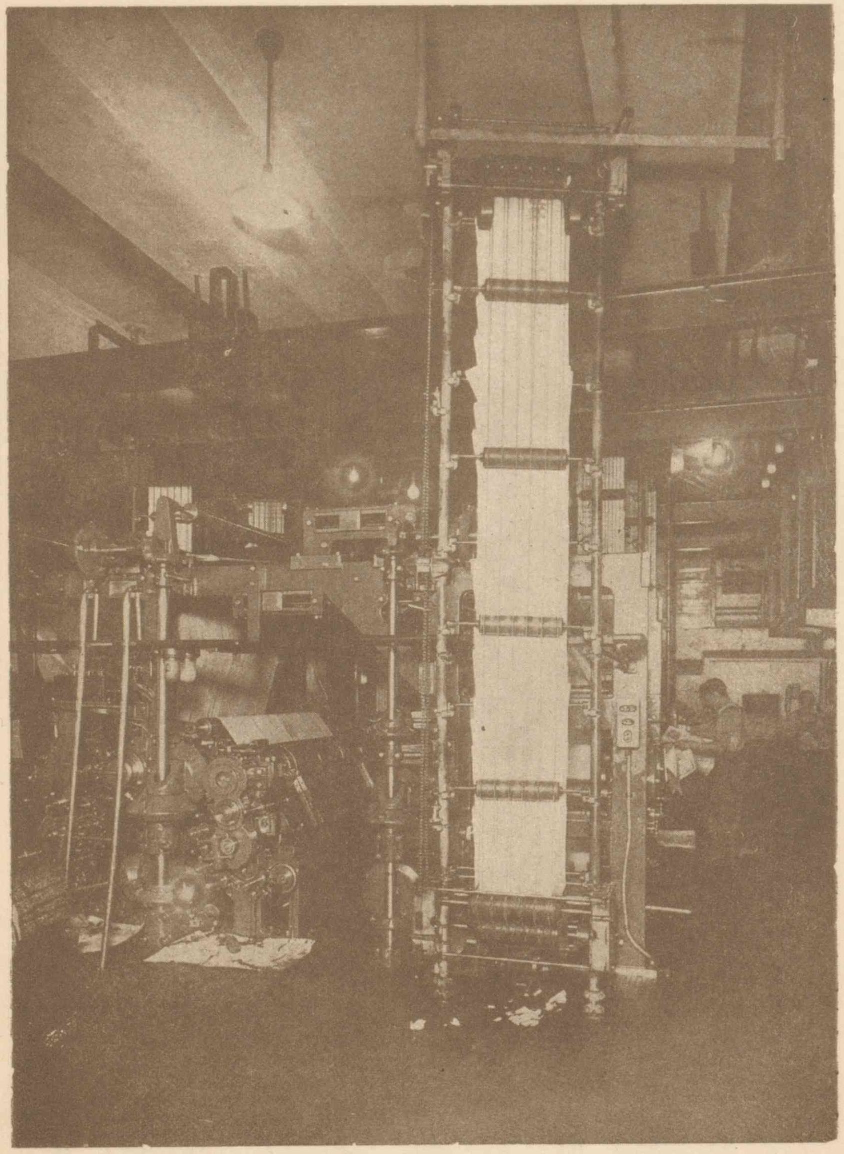
小野賢一郎筆

外勤記者は、常に世のうごきに直面してゐる。解り易くいへば、有形無形の「新聞の種になる出來事」に相對してゐるのである。新聞の種卽ちニュースは、記者に向かつて、常に必ずしも呼びかけては來ない。うつかりしてゐては飛んでもないことになる。ここに外勤記者の、苦

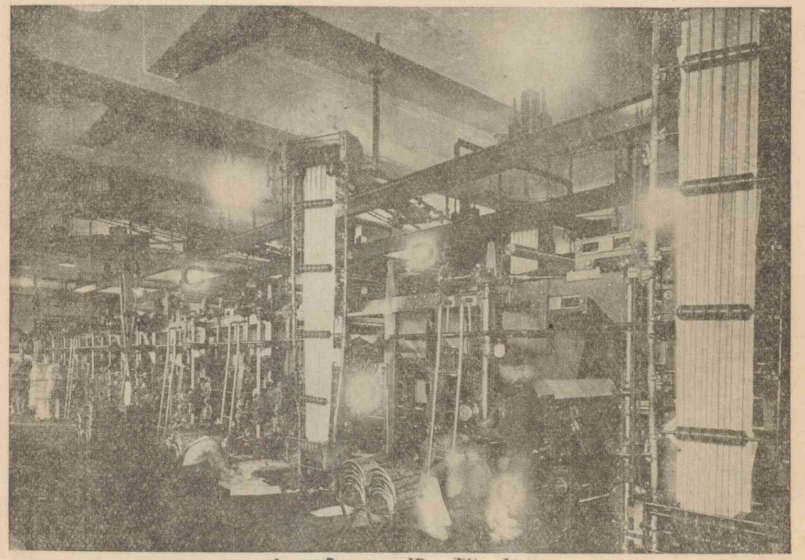
心があり、第六感の働きを必要とする。一口に外勤記者と稱しても、腕から手、手から指とあるやうに、特派員、特置員、通信員と、世界の到るところに配置され、所謂通信網が完備される。

三

內勤記者は、近來は、大抵の新聞社ではこれを統一して「整理部」と呼び、外勤記者の持つて來た材料を、適當に按配整理編輯して、印刷局に廻し、印刷局は直ちにこれを全く一種の敏速なる工作として、新聞紙に形づくり、營業局內の販賣配送をする部局へ渡す。ここから直接讀者の手に渡るのであるが、試に、夕刊の締切を午後二時半として、こ



超高速度輪轉機



輪轉機の威容

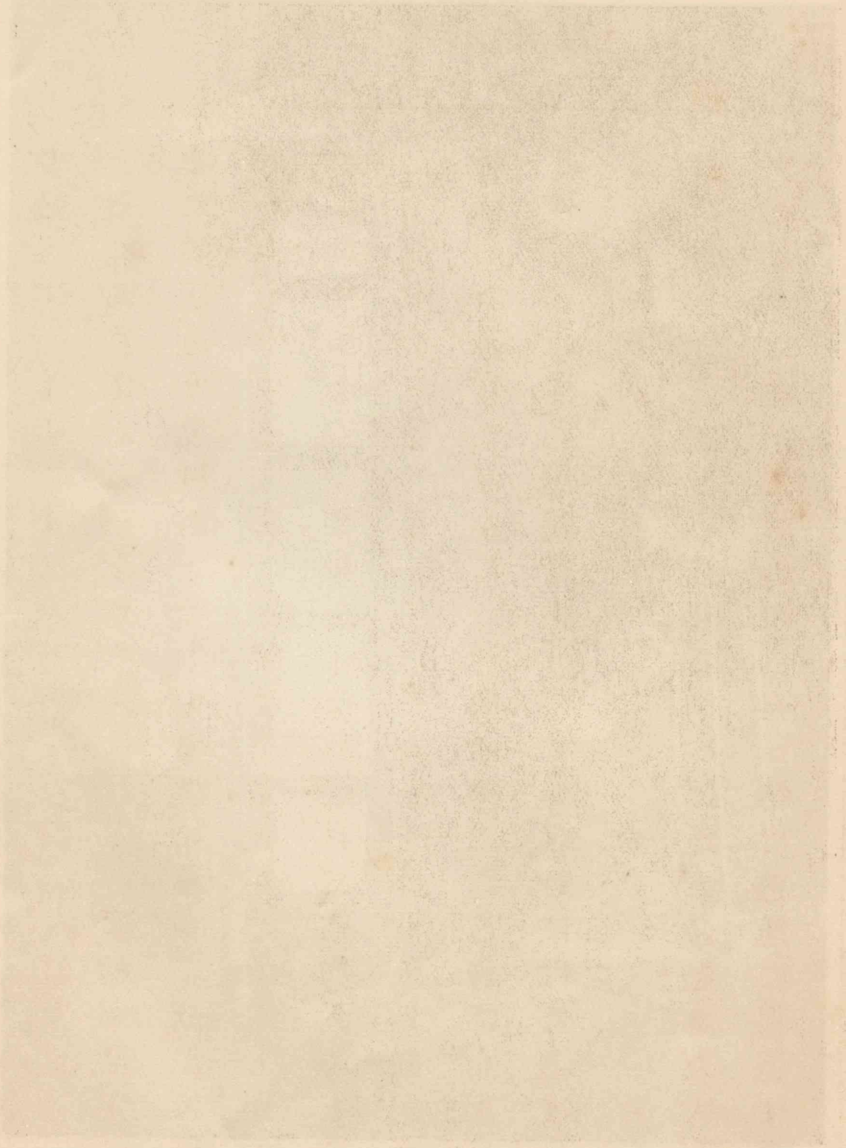
の瞬間一瀉千里に書流された原稿が整理部員に渡されたとする。それに適當な見出しをつけ、印刷局へ渡す、整理に當たる內勤記者は、テーブルの前へ坐つてばかりはゐられない。こんな時には、編輯局から印刷局迄、赤インキの筆を右手に、原稿を左に讀みながら、見出しをつけながら、走

り込んで行くのである。

それから僅か二三十分の後には、この原稿が活字に組まれ、鉛版となり、紙型となり、輪轉機に移つて、立派に刷上げられた夕刊の一部を手にすることができる。しかもそれが印刷局から營業局の手に移されて、市内到るところに「夕刊夕刊」と聲を聞くのは三時三十分前後、外勤記者の原稿が出されて僅かに一時間の後である。邊鄙な東京の郊外などの住宅へ配達されてさへ五時にはなるまい。

四

新聞を賣る、廣告を載せる。例へば地方に起きた大事件を、その土地並びに附近の人々へ特に迅速に報道する爲



に、刷上げられた新聞紙を、その地方の必要部數だけ飛行機に積んで、その土地へ運ぶといふやうな、營業局各部の働きも目まぐるしいものであるが、就中、遞送課と稱する配達方面の部門擔當者は、編輯局の締切、印刷局の刷上り等と密接な關係があつて、時に非常な苦心をするのである。

朝刊紙の締切は、大抵午前零時半乃至一時半、それが大きな事件が突發し、或は豫想される場合、午前三時となり四時となり、昭和三年御大典の際などは五時となつた實例がある。勿論、記者も、工場もその他給仕までも寢ずに仕事をするのであるが、この五時に締切つた新聞を、遲くも

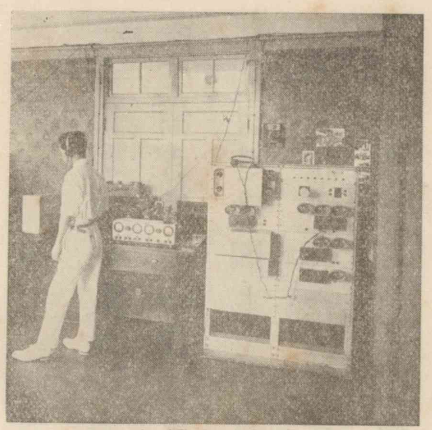
七時か八時迄には、東京市内はもとより近郊郡部にも配達せねばならぬ。その苦心といふものは、なかなか語り盡くせるものではない。

五

新聞社には、夜もなければ晝もない。たゞ締切時間によつて働き、締切時間によつて眠る。隨つて、いかなる深夜に新聞社を訪問しても、決してすべての人が寢てゐたり、活動が休止されたりしてゐることはない。記者が原稿を書いてゐなければ、輪轉機が廻つてゐる。電話が使はれてなければ、社の中に特設されてゐる電信局の機械がカチカチと鳴つてゐる。

その證據に、新聞社の電話交換手は、二名ぐらゐは徹夜して、その職についてゐる。試に午前三時なり四時なりに呼出してみても、必ず彼女たちは、元氣に答へてくれるのである。

記者を乘せ、原稿を輸送し、寫眞を運び、また特種なる新聞紙の輸送をする優秀な飛行士も、社から直通の電話機をベットの前において、その飛行機と共に、格納庫に、常にその出動を豫想してゐる。


電送寫眞室

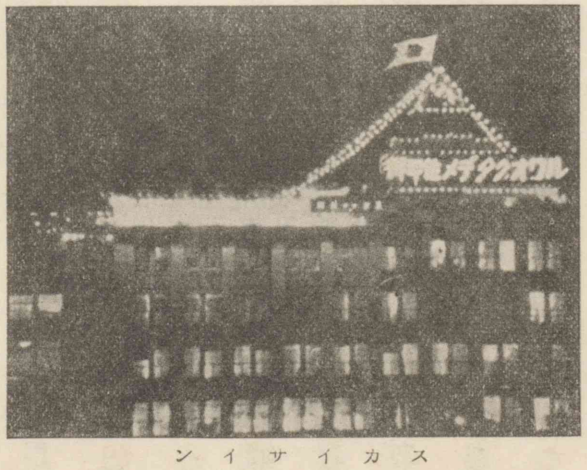
電送寫眞の技術者も社に宿直してゐれば、スカイサインの技術者も泊つてゐる。鳩の訓練者も早朝の用意の爲に泊つてゐる。少し設備の完全な社になると、深夜から曉にかけて朝の新聞配達の爲に活動する本社の遞送課員工場技術者の外に二百餘名の宿直員がゐるのである。

六

電送寫眞とスカイサインは、昭和三年秋の御大典を期して、我が國に輸入された。昭和四年七月現在にあつては共に大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、東京大阪兩朝日新聞社のみであつて、電送寫眞は外に通信社が一社これを持つてゐる。

「言葉」を電報や電話で送ると同じく、寫眞を電波の作用

によつて送るもので、例へば東京から大阪へ一枚の寫眞を送るとして、飛行機によるとしても二時間半以上を要し、急行列車でも十二時間を必要とするが、電送寫眞はカビネ版一枚を僅かに三分四十五秒にして、完全にその任務を果すのである。昭和四年春、時の田中首相が、東京日日新聞社を訪問してこの電送機を見學した際、その場で首相の見學の寫眞を寫して直ちに大阪毎日新聞社に電送し、これをまた大阪

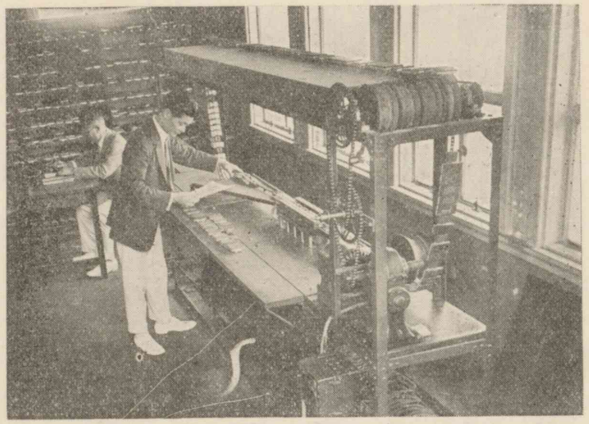


スカイサイン

から逆に首相の面前に電送して、驚嘆させたことがある。

七

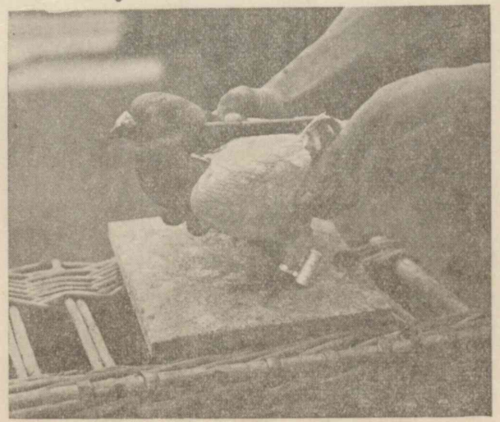
スカイサインは、電光文字による一種の空中號外である。數萬個の電球が平らに放寫版へ並び、それへ字形(じがた)の電氣を感ぜしめて、鮮かな文字を輝かせる裝置である。光の文字は十數字づつ放寫版の上を流れてゆくが、人々は歩みながらこれを仰いで、その電光によつてニュースを知ることを得るのである。通常の號外は發行迄に少なくも二十



スカイサイン裝置室

分や三十分の時間を要する。しかもこのスカイサインは、今直ちに事件の瞬間を、讀者に知らしめ得るものである。

「鳩」は、今では新聞社の有力なる一員として、動かし得ざる地位を占めてゐる電信電話のないところ、或はあるとしてもその使用に困難な場合には、この傳書鳩が最も偉大なる勳功をたててくれる。薄い紙へ書いた原稿は、アルミニユームの筒へ入れて足へ、寫眞は背中に結びつけて、それを携へて行つてゐる特派記者、寫眞班の手から放たれる。


傳書鳩

鳩は矢のやうに新聞社へ飛んで戻る。特に優秀な鳩は、自己の重大な任務を知つてゐるとさへ思はれるやうな涙ぐましい物語を殘すことが往々ある。

東京を中心に、西は大阪、東は青森ぐらゐ迄を鳩使用の有效距離としてあるが、普通一里を四分、仙臺東京間汽車で十時間を要するところを、四時間と三十分で飛んだ實例がある途中で雨になることと、大風と、日が暮れることさへなくば、まづ安全迅速な通信機關として、絶對に信用できる程度に訓練されてゐる。大きな社には四百乃至五百羽ぐらゐづつ飼養されてゐる。

昭和二年八月、八丈島から、天皇陛下小笠原島行幸の寫

眞を背にして東京へ飛び、僅か五時間で天晴れ任務を果した鳩があつた。

八

新聞の輪轉機は、明治二十五年頃始めて日本へ來た時、一時間約二萬枚を印刷し得るといつて非常に驚いたものである。然るに今日では一時間十二萬枚を刷る世界隨一の機械が、しかも日本に於て發明されてゐる。米國第一流のニューヨーク・タイムスは、十萬枚機を持つて世界一と誇つたが、日本では、わざわざ米國へ出かけてアール・ホー會社によつて十二萬枚機を作り、同社は「電光のやうな快速力をもつ日本の印刷機」と名をつけて發表し世界の

新聞社をして心膽を寒からしめた。卽ち一分間に二千枚の新聞が輪轉機を離れ、自動移送裝置で發送場へ行く、ここで手早く荷作りされ、更に遞送場に流れてゐる水平の自動移動帶の上へ乘ると、これが自然に、運搬自動車に移つて、東京市内の配達分擔所に走り、或は地方行の爲各停車場へ走る。大新聞社には三十臺以上の專用運搬自動車があり、配達分擔所も東京市内だけで百五十個所ぐらゐはあるのである。

盲人の爲の點字新聞、號外、特報掲示、ニュース映畫、社會奉仕事業、各地方版の發行、世相の鏡としての新聞の眞摯な忙しさは實に言語に絶するものがある。

(一)小説家。明治二十一年神奈川に生まれた。久遠の像。幸福の國へ。我が小畫板等の著がある。

五　知らぬ世界

加藤武雄(一)

収穫が濟むと、野はからりとする。藍色の空はいよいよ高く澄みわたつて、渡鳥の群が遠く飛んで行く。明るいけれども弱い日の光は、細かな顫動を刻みながら、靜かに下界を照らす。下界！ほんたうにかういはねばならないほど天が地から遠く見えるのである。

作物の刈取られた畑には、畝から畝に桑の乾反葉がかさこそと轉がつてゐる。そして、粟の切株だの陸穗の藁堆だのが、黄色い日光にかげろひながらそよと吹く風にも搔消されてしまひさうな淡い陰影を長く曳いてゐる。しいんとした靜寂な氣分があらゆる空間を領してゐる。

この靜かな秋の日に、色々の旅藝人が、村人の閑散なのを好機として入込んでくる。瞽女の群がくる、傀儡師がくる、角兵衞獅子がくる、よかよか飴屋もくれば、時には侏儒などもやつてくる。これ等の旅藝人の訪れは、どんなに私たち田舍の子供を喜ばせたことであらう。

「おい、行つて見ろ。角さんの所へ人形遣が來てゐるぞ。」かういはれると、私たちは手にもつてゐるものを投捨てて、非常な大事件に驅付ける大人のやうに、一散に走つて行つた。そして、人垣を押分けて、一番前の方へ出て、息をつめて、側目もふらず貪り見た。

駄々をこねる

「あゝおもしろかつた。」

「またくればいいなあ。」

去りゆく人形遣の後姿を見送りながら、私たちは心からかういふのであつた。

ところが、或日、私は不思議な見世物を見た

何か駄々をこねて、母に叱られて一泣き泣いた後であつた。漸くねだり得た二錢銅貨は、幸にあつたが、すつかり氣分がこじれてしまつて、菓子屋に飛んで行く氣にもなれず、納屋の裏口の立臼に背を凭せて、ぼんやりとしてゐた。夕日がぱつと黃色く息づいて、肌寒い風が壁に吊した乾菜をかさこそと鳴らしてゐる。前の畑の桑の枯枝が、ち

やうど魔法遣の銀の鞭のやうに、きらきらと閃いてゐた。落散つた藁屑や鷄の綿毛やが、時々ふはりふはりと足許から舞立つのを見るともなく見ながら、私はしいんとした靜かな夕暮の中に無心に佇んでゐた。

その時、表の道の方でかあんかあんと鉦が鳴つた。私は聞耳を立てた。何か歌ふやうな妙な節廻しの聲もする。「何か來たんだな。」と思ふと、私は夢中になつて、その方へ驅出した。道へ出て見ると、そこに隣の子が立つてゐた。

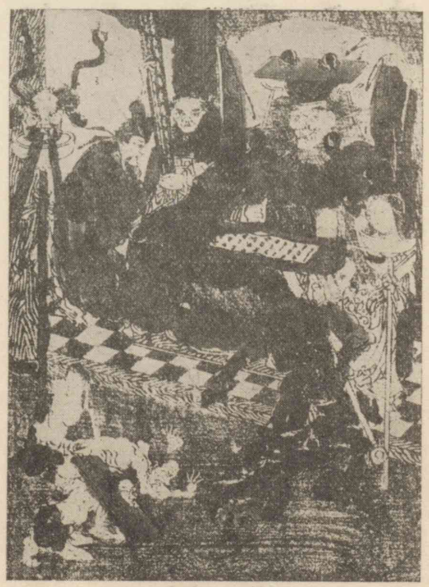
「圭ちやん、何だい、あれは。」

「知らない」

と圭ちやんはいつたが、

「行つて見よう。」
といつて驅出した。私もつづいてその鉦の音のする方へ驅けて行つた。

二三町行くと、隣部落との境になつてゐる低い丘がある。丘には榎の古木があつて、その根元に小さな地藏堂がある。その地藏堂の前の所に、屋臺のやうな妙な四角な物を据ゑて、一人の男が鉦を鳴らしながら、何かしやべつてゐた。傍によると、それは覗機關であることが分つた。鎭守様



地獄の圖

三途の川
六道の辻

の祭禮の時によくくるのと同じ見世物だが、然し、その男の説明するのによると、これはありふれた芝居や何かのではなく、地獄、極樂の光景を見せるもので、これを見ると死んでからのことがすつかり分るといふことであつた。

「さあさあ皆様、三途の川や六道の辻……。」

眇目の痩せたその男は、なほも人を集めようとして、しやがれ聲を振立てて、お經を讀むやうな調子で頻りに呼び續けてゐた。

「死んでからのことが分るつて……。」

「ほんとだらうか。」

私と圭ちやんとはひそひそと囁きかはした。「死んでから

のこと」といふ言葉が、この時妙に私の心に響いた。

　それは、三月ほど以前に、祖父の死――私を一番可愛がつてくれた祖父の死といふ事件に逢つてゐたからであらう。地獄とか極樂とかいふことも聞いてはゐたが、まだ見たことはなかつた。

「見ようか。」

「あゝ。」

と圭ちやんはいつたが、

「でも、僕は錢をもつてゐない。」

とかぶりを振つた。この見世物には一人一人に錢が要るのであつた。私は菓子を買つた方がいいと幾度も思ひ返

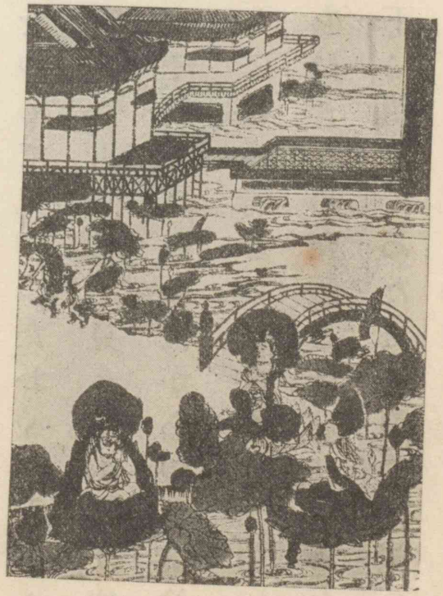
展開

して躊躇したが、たうとう思ひきつて二人分の二錢銅貨を出した。

　私は、その眼鏡の口に眼を當てて、そこに展開された不思議な世界の光景を、息をつめて見守つた。おゝ、何といふ不思議な恐しい世界であらう。遠く廣く見える幽暗な空間の中には、眞黒な針の山や、眞赤な血の池があつた。三途の川、六道の辻、そこにもここにも青、赤の鬼共がゐて、白い着物を着た死んだ人たちは、蒼ざめた顏を苦痛に歪めながら、その鬼共の鐵棒の下に悶えてゐた。更に別の眼鏡の中には、極樂の光景があつた。蓮の花の咲いた綺麗な池、天人の舞うてゐる立派な御殿、紫の雲がたなびき、その間か

ら金色の光が雨のやうに降注いでゐた。勿論それは極めて粗末なからくりに過ぎなかつたが、活潑な少年の想像が手傳つて、不可思議な幽界の消息をまざまざと私の感覺に傳へてくれた。

私は眼鏡から離れて後も、ぼうとなつたやうに、眼先にちらつくその不思議な光景を追うてゐた。秋の夕暮の弱々しい光の中には、その知らぬ世界の影像があつた。



極樂の圖

「ほんとかなあ。」

私がかう呟くと、圭ちやんも、

「うん、ほんとかなあ。」

といつた。

私は死んだ祖父のことを考へ出した。あのいいお祖父さんは、無論極樂の方に行つてゐられるに違ひないが、然し一體それは何處にあるのだらう。私の心は顫へた。

私の小さい魂は、その時分から、時と所との限りもない世界におびき出されて、心細く頼りなくさまよひ出し始めた。

それは私の七歳の時であつた。

――夢見る日――

六　秋の讃美

上司小劍(一)

秋は昔から物の凋落を意味するやうに思はれて來たけれども、凋落の裡に復興の氣の溢れてゐることを見遁すことはできない。

澄みきつた大氣。……それはひとり秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つ一つ磨きあげられたやうに鮮かな光を放つ。遠くにあつた山は近くに引寄せられたやうに、近くの野はいよいよ近く、呼べば應へるばかりである。

秋晴の日に赤蜻蛉の飛交ふのを見るのは風情のあるものである。秋の太陽は春の太陽よりも人間に優しい。人

(一)小說家。名は延貴。明治七年奈良縣に生まれた。木像、鱧の皮、東京等の著がある。

凋落

風情

間が日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔かい光がまづ夕涼の客に親しまれる。團扇片手に顏を掩うて、「お星樣ばあ。ゐない、ゐない、ばあ。」を宵の明星に向かつてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

天體の鮮かに仰がれる秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは覺えてゐて、恒星と惑星とを區別するぐらゐのことは誰にでもできる。北斗七星をまづ數へて、次には天の川を見る。

荒海や佐渡に横たふ天の川。

の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。

星辰

情趣

（一）「心なき身にもあはれはしられけり鴫立つ澤の秋の夕暮」（新古今集）

（二）「芭蕉野分して盥に雨を聽く夜かな」。

古來詩人といふ詩人は、いづれも天體に親みをもつてゐる。遠い遠い月や星をば、地上の動物や植物のやうに自分の友だちとして見てゐる。牽牛、織女の話などは、いかにも人間と天體とのゆかしい融合を語るものではないか。

これも秋の情趣の一つであらう。寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。（一）鴫立つ澤の秋の夕暮の西行法師や、（二）芭蕉破れて盥に雨を聽く芭蕉など、皆秋の詩人と稱することができる。枯木、寒鴉の寂しみに生きた芭蕉は、秋といふよりは寧ろ初冬の情趣に生きた詩人といはなければならないが、彼の讚美した時雨、枯野などは、俳諧の季に於ては冬に屬するけれども、情緒の

（一）「飛仙を挾んで以て遨遊し、名月を抱いて、而して長へに終らん」（前赤壁賦）

（二）宋代の文豪。名は軾。東坡はその號、徽宗の建中、我が國の康和三年（一六七一年）歿、年六十。

（三）東京市深川區。

（四）「名月や池をめぐりて夜もすがら」。

上からはどうしても秋のものである。澄みきつた、さうして寂しみのある秋といふ時季があるので、よくも生きて來たとでもいひさうな詩人が日本には非常に多い。

天體の一つとして最も我々の世界に近い月は、昔から多くの詩人によつて讚美され、わけても東洋の詩人によつて感傷的な言葉を投げられてゐる。さうして、それはすべて秋に於てである。月といへば、もう秋のものといふ氣がするではないか。（一）名月を抱いて……の名句を赤壁の賦に殘した（二）蘇東坡の秋を讚美した心と、我が芭蕉翁が（三）深川の庵室に名月を仰ぎながら、たゞ一人（四）池をめぐりて夜もすがらの寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

星辰の鮮かに仰がれる秋の夜には、巷の天文學者がなかなか多く現れる。我々が天體に對して絶えず考へてゐることは、あの自由な組織である。毫も個々の自由を束縛されずに、殆ど絶對自由の中に、一定の軌道を循つてゐる星の姿が羨しい。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、だらしなさ……。そんなことを考へるのもまた秋の夜の感傷の一つで、澄みきつた空なればこそ、天體に對して讃美の聲を發するのである。天體の讃美は卽ち秋の讃美である。

七　宮島にて

有本芳水(一)

たゞ一人なる旅人に
舩路も近し宮島や
入日は秋の山近く
沈みて、島は暮れにけり。

暮れて旅籠(はたご)の欄に倚り、
まぢかき海を眺むれば、
水にうつれる月のかげ、
さながら姫の櫛かとも。

島は祭の宵なれば、

(一)詩人、歌人、名は歡之助、明治十九年岡山縣に生まれた。旅人、芳水詩集、海の國等の著がある。

旅籠

月の光にそゞろきて、
宮まうでする人々に、
はしき少女（をとめ）も交るなり。
秋の夕べを悲しげに、
浦回（うらわ）に響く笛の音。
月は宮居に空たかく、
鳥居のかげは水にあり。
安藝の宮島廻れば七里、
月かげ青き海原に、
唄おもしろく船漕ぎて、
宮にくる子はたが子ぞや。

心さみしき旅の身は、
月の光にあこがれて、
とほき渚のこなたより、
宮居まぢかく歩み來ぬ。
七段たかききざはしや、
長き廊下を歩む時、
ひたひた寄する夜の潮、
さても龍宮に似たりけり。
海の匂もなつかしき
丹（に）なる柱に身を寄せて、

笛の響を聞きゐれば、
涙流れてとゞまらず。
あゝ少女子よ、燈籠に、
赤き灯影を入れよかし。
こゝろの鉦を打鳴らし、
歌ひあかさん旅の身は。

八　土器賣る翁

柳澤淇園(一)

伏見より年七十歳許なる老翁、土偶人、土器のたぐひを擔ひて、洛中を賣りありくあり、常に商ふ家に來りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁にいひけるは「御身の擔ひたるものは、その價いかほどばかりの品にか。」と問へば、翁答へて「銀十五六匁ほどの荷なるべし。」といふ。また問ふ「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかがする。」といへば、「それこそ過なれば、さることなしとはいふべからず。さある時は、そのことをありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」といふ。また問ふ「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかがする。」と詰りいへば、「いかに問屋なりとて、數度の無心もいひ難ければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりともいたすより

(一)江戸時代の名士。大和の人。寶暦八年(二四一八)歿、年五十三。文寶雜譜、雲萍雜志等の著がある。

土偶人

無心

(一)江戸時代の心學者。京都の人。天保十年歿、(二四九九年)五十七。鳩翁道話。續鳩翁道話等の著がある。

日ざし　日のさしぐあひ。

八つさがり　午後二時過。ひどく腹のへつたのをいふ。

釜の中に蜘蛛の巣がはる　たく米がなくなる。

知行　生活のもとで。

外にせんかたなし。」といへり。

—雲萍雜志—

自修文

心の洗濯

(一)柴田鳩翁

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつの間にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根。大根。」と賣歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の內から「これ大根屋。」と呼ぶ。やれうれしや、まづ知行にありついたと、呼ぶ所を見れば、表御門から

月代　もと男が髮を半月形にそつたこと。さかいき。

百に三把　一把三十三文。

懸直　實價より高くいふ直。

かぶり　頭。

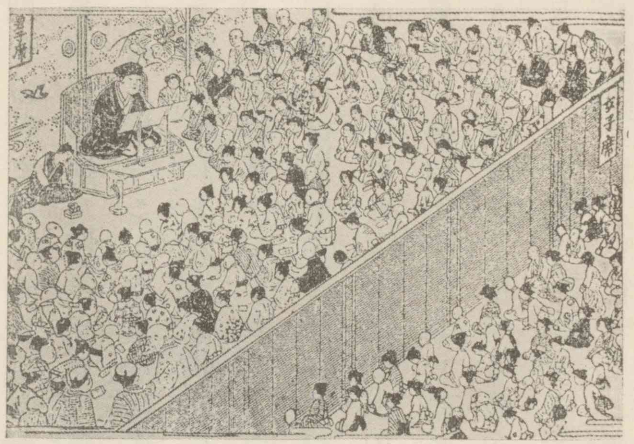
右へ三つ目の窓の內から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀のうち、門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、緣先の障子をあけ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向かうて自分の髮を結ひながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。「百に三把でございます。」といへば、「それは高い。二十四文づつにして置け。」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません。」といふ。かのお侍かぶりふり、「それでも高い。まからずば、まづよしにせう。」と言捨てて、緣先の障子をはたと締められた。

（圖）

しやうもやうもなく　どうともしかたなく。

大根屋もいろいろというて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、「はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。なんでも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繫がれぬ。なんとしたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、緣先の金だらひにふつと目がついた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狹



心學の講義

ぬからぬ顏　油斷のない顏。

うなつて、五尺の身體を暫くも置くべき所がない。

そこで荷を擔いで、門口を出ようとすると、障子の內から、「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で「まかりません。」といふと「いやいや、直はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりと明けられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把ほど入りまする。はした賣はできません。」といふ。「いやいや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先へ並べてくれい。」といはれる。さあ大根屋も一所懸命、障子の締つてあるうちなら、金だらひの出しやうもあらうに、今更金だらひが出されもせず。というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろうろとしてゐると、かのお侍が、大根屋の顏をきつ

われは　汝は。
きつう　ひどく。
根性　こゝろね。
氣だて　きまへ。性質。
氣色　やうす。

と見て「われはきつううろたへてゐるぞよ。まづ金だらひから出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わなわな震へながら、かの金だらひを恥づかしさうにそつと出して、土に手をつき「旦那樣眞平御免なされて下されませ。何を隱しませう。先刻も申しまする通り、けさからまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りまするとあす親子五人が食べますことがなりません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もございません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命を助けなされて下さりませ。」と色青ざめて、土にあたまをすりつけて、わび言をする。
かのお侍思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず。
「いやいや、そのわび言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ。」
といはれる。こはごはながら、大根を緣へ積上げたところが二十三把。かのお侍、大根賣を呼んで「さあ、その方がいふ通り、二十三把七百六十四文、序に金だらひを添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほど汚れてゐると見える。この金だらひは顏や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨てて、障子を締めて内へはいる。かの大根屋もこれから本心になつて、夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふことであります。

——鳩翁道話(一)——

九　配所の菅公

むかし顯基(二)中納言といふ人は「罪なくて配所の月を見ばや。」といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢる

(一)鳩翁の講話をあつめた書。
(二)源顯基。後一條天皇に仕へた。永承二年(一〇四七年)歿。
配所
俯仰天地に愧ぢず

肝膽相照らす友

眞澄の鏡

一介

(一)延喜三年（一五六三年）歿、五十九。

ことのない心を以て眺めてこそ、肝膽相照らす友である。眺められる月に一點の曇もなく、眺める我が心に一塵の汚もない麗しさ。良心の眞澄の鏡は、卽ち皎皎たる月の光に外ならぬ。

菅公左遷（尾竹國觀筆）

心靜かに月を見て、靜かに月を樂しむ人は、世に一人の友もなく、一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である。

罪なくて配所の月を見た人は、(一)菅原道眞であつたらう。

清朗明徹

老境

皎潔

左遷

海ならずたゞよふ水の底までも
　きよき心は月ぞ照らさん

の一吟を味はつて見れば、公の心は清朗明徹である。なんの犯した罪もないのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子供も散り散りばらばら、やゝ老境に入つた身を以て、筑紫のはてに棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しなければならぬ。公の行は餘りに月のやうに明白であつた。公の心は餘りに月のやうに皎潔であつた公が秋月に問ふといふ詩には、「爲問未曾告終始。被掩浮雲向西流。」とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲であることは、昔も今も知らぬ人はない。公が月に代つて答

へる詩に「天迴玄鑒雲將霽唯是西行不左遷。」と自ら慰めてゐるのや、秋夜の詩に「月光似鏡無明罪。」とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點のやましいところのないのがわかる。(一)九月十日の夜、月影淸く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊を思ひ出して、

去年今夜侍淸涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。　捧持每日拜餘香。

と口吟された。かつては九重の雲居の上に見た月を、今は配所の月と詠められた公の心事は察するに餘りあるが、公のやうな僞のない心を以てこそ、月に對しての問答もできるのである。公が配所の慰藉は、梅よりも、菊よりも、家

(一)延喜元年。
口吟
慰藉

鄕の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なかなかに心づくしの浮雲も
ひかりを添ふる有明の月　本居春庭(一)

一〇　菅公の夫人

山田新一郎(二)

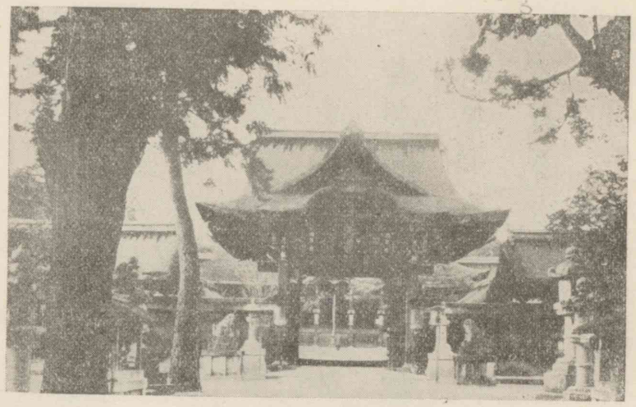
菅公の夫人は京都の北野天滿宮(三)の西の御座に祭られてある。夫人は菅公に別れて數年の後には、棲むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓してゐられたので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人が五十歲に達した時、醍醐天皇(四)がわざわざ祝賀の勅使

心づくしの月影
(一)本居宣長の子。文政十一年(二四八八年)歿、年六十六。
(二)北野天滿宮宮司。天治元年福岡に生まれた。梅花遺芳等の著がある。
(三)官幣中社。京都市京區馬喰町に在る。
(四)第六十代。
寄寓す

有數な

內助

をお遺しになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつたことは考へられる。菅公の御子方はなかなか大勢であつたが、上の方の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流されたほど、そろうて相當な位置に出身されたところから見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい夫人の內助も與つて力のあつたことと思はれる。



北野神社

(一)拾遺和歌集卷十六雜春の部。

(二)拾遺和歌集卷六。

琴瑟の情

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

(一)東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛な夫人に別を惜しまれたものとゝいはれよう。西遷の途すがらも、都への便にことづけて、

(二)君が住む宿の木ずゑをゆくゆくもかくるゝまでにかへり見しはや

と盡きぬ名殘を惜しまれたのも、卽ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟の情もしのばれるのである。

掃撤
食祿

夫人が京都の留守邸に於ける獨居の樣子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲慘極る二箇年の月日を送られたに比べて、京都の方もまた劣らぬ境遇であつたことが想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に「雪夜家竹を思ふ。」と題して「家僕は早く逃散しぬ。寒を凌ぎて誰か掃撤せん。」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた樣子だが、雪押竹の雪を拂ひ除けるものもあるまいと、故鄕のことを氣遣つて居られる。この詩は延喜元年卽ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは、申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかも御咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもも早々に逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてゐられたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として表れてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが、「家書を讀む。」と題していはく、

「消息寂寥たり三月餘。便風吹着く一封の書。」

三月餘りも都の便が絶えて、甚だ寂しく感じたが、けふは

はしたない
權門
便風

米鹽の代

(一)公の屋敷址を後世天神御所といふ。

いかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、うれしいことである。

「西門の樹は人に移し去られ。」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つた。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたのであらう。

「北地の園は客を寄居せしむ。」

(一)天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたもの

寵遇

草根木皮

配煎

いやしくもせず

と見える。庭木の賣食に下宿業。これがきのふまで右大臣として帝の寵遇斜ならなかつた菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれたであらうか。

「紙に生薑をつゝんで藥種と稱し。」

昔の草根木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはば生薑は家庭衞生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。」困難の中でも一物もいやしくもせられぬ夫人の用意のほどが知られる。

「竹に昆布を籠めて齋儲と記す。」

總菜
神饌
千言萬句
反面
凜乎
百難を排す
藥餌
齊家

内の御祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされず直ちに、竹筒に入れて、御祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に殘された菅公一家の生活狀態を菅公の筆で表してゐる。なんたる悲慘な境遇であらうか。その反面には、夫人が凜乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、藥餌のはてまでも注意して居られる。誠に行屆いた齊家の有樣が、ありありと見えるではないか。

「妻子飢寒の苦みをいはず。これ還つて余を懊惱せ

懊惱
指を屈す

しむるを愁ふるが爲なり。」

留守宅の現狀は前の如くであるが、それをたゞその通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言もいうては來ぬ。いはないどころか、御留守はとにかくどうにかやつてゐますと、却つて安心を求めてくる雄々しさは、なかなか並々の婦人でできることではない。榮華これ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人といへようと思ふ。

（一）詩人。名は操。曾て羅風と號したこともある。明治二十二年兵庫縣に生まれた。廢園。信仰の曙。象徴詩集等の著がある。

一一 夜の世界

三木露風（一）

風が吹くとも思へぬが、
山の中には音がする、
松の梢を鳴らす音、
山毛欅の林がゆらぐ音、
高い小さい月がゐる。

月、月、月

麓の霧に聲がする、
水がせかれて落ちる聲、
きよい自然が叫ぶ聲、

大地の胸が響く聲、
月の光で霧となる。

月、月、月

黒い岩には花がさく、
白いこまかい苔の花
いちめんに咲く苔の花、
黒い岩には月がしみ、
苔の花には露をもつ。

月、月、月

ひとつびとつが聲をだす、
ひとつびとつが光りだす、
自然のものはすべてみな、
ひとつびとつに聲をだす、
ひとつびとつに光りだす、
森閑とした夜の世界。

一二　感慨多き角板山。

幣原坦[一]

角板山は臺灣の新竹州大溪郡にある高い臺地で、連山幽谷の間に横たはてゐる。海拔四百三十七メートル、面積約六町歩ある。高臺から見おろすと、眼も眩するばかりの深い谷が繞つてゐるが、その東北の谷間を縫つて一條の

(一)文學博士。臺北帝國大學總長。明治三年大阪府に生まれた。世界小觀。朝鮮史話。世界の變遷を見る等の著がある。

連山幽谷

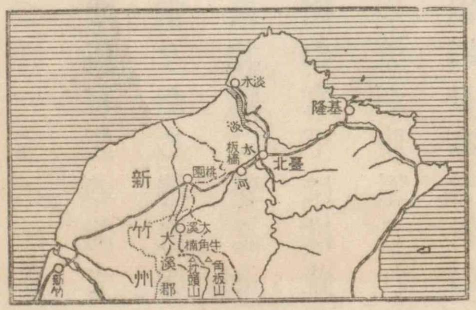
渓間の月

庄田鶴友筆

緩慢
疾驅狂奔
變幻出沒
端倪

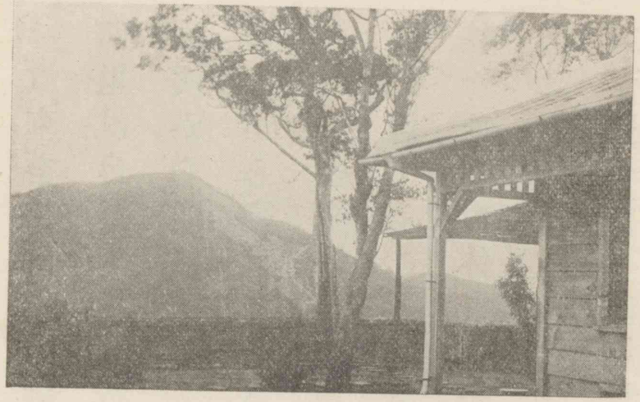
青い水の流れてゐるのが、卽ち淡水溪の源流である。

汽車を桃園驛に捨ててから、大溪郡衙の所在地までの四里は、自動車でも行くことができるが、大溪から角板山までの五里半は登道であるから、臺車に賴らなければならぬ。然し、その臺車は、行步が緩慢で山景を賞するに適することもあれば、疾驅狂奔して往々危險を伴ない、變幻出沒、殆ど端倪することのできないこともある。特に自分等が登つた日は、濃霧が濛々として、幽溪を封じ山腹に迫り、更に一層の壯觀を加へた。登り登りして、ふと山の角を



廻つたと思ふと、霧が俄に晴れはじめ、幽邃で且つ大きな谷の向側には、すでに角板山が浮出てゐたのであつた。

臺車は角板山の貴賓館の前で止つた。貴賓館は堂々たる總檜造の大厦で、高臺の東北隅に聳え、それと相對する峰巒の直下には、藍のやうな淡水溪の流が俯瞰されるが、その美觀は優に日本十景の一にも算へ得られるであらう。



角板山

大正天皇がまだ皇太子にましました時、臺灣に行啓あ

そばされるといふので、時の總督は、角板山へも御迎へ申し上げようとして、この貴賓館の建築を思ひ立つたが、行啓の御中止となつた後にも、建築だけは遂行することになつて、大正三年五月落成した

それが大正十二年になつて、實際の御用に立つた。卽ちこの年の四月、時の皇太子殿下（今上陛下）が臺灣に行啓あそばされた時、(一)甘露寺侍從を角板山に御遣しになつたばかりでなく、大正十四年五月に秩父宮殿下御外遊の途すがら、また臺灣に御立寄りになつた時には、御自身ここに御出でになつた。殿下の御轎を御かつぎ申し上げた本島人が御轎を貴賓館の玄關におろした時、殿下が「有難う。」と

(一)名は受長。伯爵。明治四十三年十二月東宮侍從に任ぜられた。

會釋

獰猛

御會釋を賜はつたといつて、非常に感激して人に語り傳へたことは、この邊の人々に大なる印象を與へた。大溪と角板山との中間にある牛角楠といふ勝地にも、殿下が御休憩になつたので、更にここに記念堂と展望臺とを設ける計畫がある。

かやうに今日は、名を九重の雲居の上にまで揚げてゐる角板山も、その昔をたづねると、随分ものすごい話があつたのである。この高臺はもと四方は雜木林に蔽はれ、その林野の間に蕃屋が點々と散在してゐた。さうしてここの蕃人は、臺灣の七蕃中でも最も獰猛なタイヤル族の一つで、なかなか頑强に我が警察官に抵抗したから、長期に

俎上の魚

わたつて戰鬪が繼續されたのである。

明治四十年の五月であつた。桃園廳及び深坑廳の警部以下一千九百人の前進隊は、角板山の西に峙つ枕頭山を占領しようと企てた。何となれば枕頭山は海拔六百三十三メートルで、ここに蕃人が據つてゐる間は、角板山の高臺は俎上の魚であるからである。然るに枕頭山は北蕃中に雄を稱するタイヤル族の根據地だけあつて、一朝一夕には陷落しない。戰鬪が一月つゞき、二月つゞき、三月つゞいて、まだ陷落しなかつた。さうしてその間に、前進隊副長桃園廳の警部早川源五郎氏以下百七十名の戰死者と、二百三十九名の負傷者とを生じた。行動開始の後百六日を

歸順

虎口を脱す

經て初めて占領の目的を達し、角板山に隘勇監督所を置いた。隘勇とは今日の所謂警手であつて、本島人及び歸順した蕃人を採用して、警察官の補佐たらしめたものである。

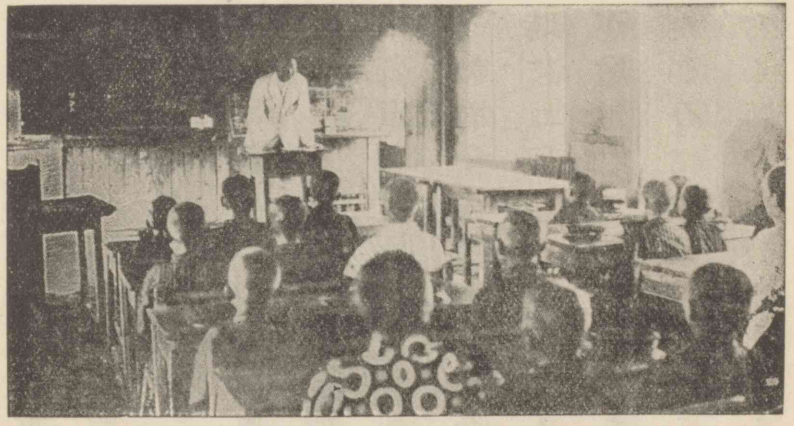
タイヤル族はなかなか負惜みが強い。それから二個月の後土匪と共謀して恢復を企て、約三里にわたる隘勇線を奪還し、所在の警備員を虐殺した。角板山の監督所も甚だ危かつたが、所員は死力を盡くして賊を防ぎ、救援隊の到着で漸く虎口を脱した。それから蕃匪討伐隊が編成され、十二月になつて全く平定を見るに至つたのである。明治四十二年、この邊一帶の蕃族が全部歸順したので、その

一視同仁

七月から角板山に蕃童教育所をさへ開くこととなつた。我々はここに至つて、明治天皇の御製を謹誦せざるを得ないのである。

新高の山より奥にいつの日か
うつし植うへきわかをしへ草。

蕃童教育所とは、蕃地に在勤する警察官が、生蕃の兒童を教育する所である。角板山の蕃童教育所が開始された時には、兒童の數は僅かに二十名であつたが、その後定員が増加して四十名となつた。初はなかなか入學しなかつたが、今では爭つてくるやうになつた。一視同仁の天恩を布く教育の效空しからず、大正十五年四月までの卒業者



角板山蕃童教育所

三十八名は、附近の蕃人の模範となつて、蕃界に非常な働をしてゐる。

　我々がこの教育所を視察しに行つた日は、午前七時から兒童がうちそろつて、大正天皇御不例の御平癒を祈願する爲に、三里向うに設けられた遙拜所に赴く日であつた。そこで我々は視察を遠慮しようかと思つたが、教育所からの申込があつて、午前六時に來てくれとのことであつたので赴いたが、教師たる警官本野演暢氏は、それから七時まで快く兒童の活動ぶりを見せられた。本野氏はもはや長い間、夫人と共にここの教師をして居られ、蕃人間に信望があり、兒童は教育所ではこの夫妻を先生と呼んでゐるが、教育所以外では、父母と稱してゐるといふことである。

　自分は曾て東海岸巡視の節蕃童の知能上に一種の缺陷のあるのを發見したのであつた。卽ち割りきれない數の取りあつかひに窮することである。角板山あたりの兒童はどうであらうかと思つて、「三錢の郵便切手は十錢で何枚買ひ得るか。」とか「二十人の兒童に五十本の筆を分配

手に入る　上手

(一) handkerchief.

するには、一人に何本づつ與へればよいか。」といふ問題を出して、本野氏を煩はした。第一問は早速明答を得た。第二問は少々まごついたが、本野氏の巧妙な思想整理によつて、これまた直ちに解決された。

それが濟むと、本野氏の活潑な指導の下に、習字や圖畫が始り、息つぐ暇もなく、兒童は教壇に出てお話をしたが、いづれも手に入つたものである。「虹の歌」で發表の上手なのに驚かされてゐると、その次はかの「水兵の母」で、聞くものを涙ぐましめた。それに引きつゞいて「一太郎やーい」をば掛圖で説明しながらやられたから、遂にハンカチーフ(一)を出さゞるを得なかつた。その上最後に、秩父宮殿下のお

勿體ない

話をするものが出て、

殿下には、畏くも我々の教室を御覽下さつたので、勿體ないと思つてゐると、殿下は更に本野先生に對して、「子供はいつも內地服を着てゐますか。」とか「御飯の副食物にはどんなものを與へますか。」とか「ごく寒い時には、子供一名に毛布何枚を與へますか。」とかいふやうな御深切な御たづねがあり、また「蕃人と呼びたくない。」とさへ仰せられたと洩れ承りまして、有難さが身にしみました。

といふに至つて、自分等の胸には轟く思がした。

もはや一同の出發時刻である。辭し去らうとすると、本

多とする。

野氏から一言のあいさつを求められたので、さて立上つたものの、胸の轟はまだ止まないそこで極めて簡單に、彼等平生の勉强を多とする旨を述べ、また「今日はこれから、陛下の御平癒の祈願に行くといふのは、まことに結構なことで、諸君の熱心な祈願は、さぞや神様も聽いて下さるであらう。」といはうとして「陛下」の一言が唇頭から洩れるや否や、兒童一同は立ちどころに身を正して「氣をつけ」の態度を以て謹聽したので、自分の胸の轟は更に一層强大となつて、殆どものがいへなくなつた。かやうにして蕃人は、今や昔とうつて變つて、我々と同様皇室を尊ぶものとなりつゝあるのである。

敎化。
貢獻

この敎育所の卒業者の中には、なほ進んで臺北の醫學專門學校を出て、錦を着て鄕に歸り、公醫を勤めてゐる人が二名まである。角板山に在勤する人は、その名も宇津木一郎といふ。對話その他の言動が內地人と寸分違はないので、自分は初め、蕃童敎育所の出身であることを覺らなかつた。この公醫の診療所に、看護婦として在勤してゐる宇津木スミ子、關野雪子の二女史も、またこの敎育所出身で、日本赤十字社看護婦修了者であつた。このやうな人々が、蕃人の生命の救濟にまで手を着け、蕃界の敎化に貢獻しつゝあるのは、眞に喜ぶべきことである。

(一)小說家。慶應義塾大學教授。明治十九年福島縣に生まれた。彼の生ひ立ち。蟹等の作品がある。

自修文

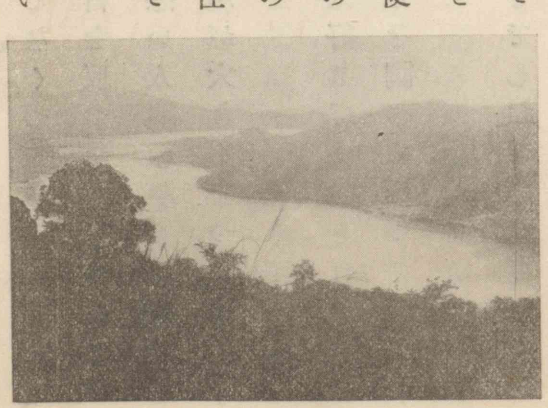
臺灣の蕃人と暮した話

小(一)泉　鐵

臺灣は大きさからいふと九州よりも小さいのですが、大きい山が澤山あることからいつたら、とても九州などはくらべものにならないほどです。日本アルプスの山々などよりももつと大きい山が幾つも幾つもあるのです。臺灣の山脈といふと北部の東海岸から始つて、まづそれが西へ進んで中央部に達し、それから殆ど眞直に南に走つてゐるのですが、それを中央山脈といつてゐます。

この山脈がある爲に臺灣は二つの大きい地方に分れてゐます。この山脈の西方にあたり、臺灣海峽を隔てて支那大陸に面してゐる方を西部臺灣といひ、東の方の太平洋に面してゐるのを東部臺灣といふのです。西部の臺灣は昔からスペイン人やオランダ人も來て住んだことがあり、支那とは直ぐ近くですから早くから支那人が來て住んでゐたので、日本が臺灣を取る以前には隨分文明が進んでゐたのですけれども、東部の臺灣と中央山脈の山の中とは交通の不便なところから全く開けずにゐたのでした。その東部と中央山脈の山の中には蕃人たちが澤山に昔から住んでゐたし、今でも住んでゐるのです。

皆さんは蕃人といふと大變恐いもののやうに話をきいてゐるかも知れませんが、決してそんなものではないのです。みんなそれは大變いい人たちなので



臺灣の風景（日月潭）

す。昔人間の首を取つたりしたこともありますけれども、今はそんなことはなくなつてゐますし、また昔首を取つたといつても、それはたゞ無暗に取つたのでなくつて、いろいろとあの人たちには譯があつたのです。昔首を取つたことがあるからといふだけであの人たちを大變惡い人間のやうに考へるといふことは間違です。それは皆さんが大きくなつてから考へると解ります。

私は蕃人のことを調べるのが大好きで、またそれが私の仕事なのです。それで私が蕃人のことを調べに行つて山の中を歩いた時のことを話しませう。

それはある年の十月の末のことでしたが、臺灣ではまだ十月は暑いのです。平地にゐる人たちは白い服を着てゐます。然し山の中へ入るとさうはゆきません。私の歩いたところは三

蕃人と住家

千尺から八千尺ぐらゐの山の中ですが、五千尺以上の所になるともう全く日本の秋です。ちやうどその温度が東京あたりの十月頃と同じであるばかりでなくその邊に生えてゐる植物までが、すつかり平地の亞熱帶産の植物が影を潛めて仕舞つて私たちが内地で毎日見てゐるやうな植物ばかりになつてしまひます。ちやうど日本の緯度と臺灣の山の高さとが同じやうな比較になるからです。

それで臺灣の平地では全く見られないやうな、しかも內地では少しも珍しくない草木が澤山に生えてゐます。そればかりか光線までが全く日本の十月頃の光線で、澄んだ空の中に黄ばんだ光が充ち滿ちてゐます。それは平地から三日も四日もかゝるほどの山の中ですが、ちつとも山奧に入つたやうな氣がせずに、何だか奈良の近所でも散歩してゐるやうな氣がするから不思議です。大きい高い山を平地から見るとても嶮しくて、岩だらけのやうに思はれますから、こんな所があるとは思はれませんが、入つて見ると、幾つも幾つも大きい山の間に立派な平地があるのです。そしてそこで見る山は大して嶮しくもなく、また尖つてもゐずに、私たちが大和地方で見るやうな圓みを帶びた穩かな形をしてゐるのです。そこがもう六千尺も高いのです。そしてそんな山の中を割に大きい川が靜かに流れてゐます。

蕃人たちはこんな山の中の川のほとりに村を造つて住んでゐるのです。その村は家の造り方は日本のとはちがつてゐますが、日本の田舍の農村と少しも變りはないのです。日あたりのいい丘をえらんでそこを住家とし、そして皆百姓をやつてゐるのです。然しもう三千尺以上も高い所になると米を作ることができないで皆粟を作つてゐます。毎日の御飯は粟を食べるのです。米のできるところは平地か平地に近いところの村だけです。麥は作ることも知らなければ、食べもしません。粟の他には甘藷や里芋を作つて御飯の代りに食べるところもあります。

蕃人は日本人のやうに肥料をかけることを知りませんから、一の畑をいつまでも耕してゐると、土地がやせてしまつて

作物ができなくなります。さうするとあの人たちはその畑に、榛を植ゑてその儘にして置くのです。そして別に新しい土地を見つけて畑をつくるのです。その畑はみんな平らな所よりも少し斜めになつた所を選ぶのです。そしてそこを畑にしようと思ふと蕃人たちはその土地に火をつけて木や草をすつかり焼拂つてしまうのです。その焼けた草や木が土地を肥してくれることになるのです。それで蕃人たちは必ず前のと後のと二つづつ畑をもつてゐます。後のがやせてくると今度は前の畑へ行つて、先に植ゑて置いた榛の林の枝をおろし、そしてまた火をつけるのです。枝は薪にして使ひます。

またその畑は皆の人が仲好く相談して分けて、自分たちの持分をきめてゐるので、喧嘩をするやうなことはありません。見知らぬ人や他の種類の人たちとは時々喧嘩をしたり、首を

取つたりすることもあつたのですが、今では村の中はほんたうに平和で仲がよいのです。

それで農作物は自分自分で作つてゐますから、分けることをしませんけれども、狩に行つた時の獲物は行かない人たちの家まで皆平等に分けてやるし、魚をとつても決して自分たちばかりで食べるとか、一人だけが多く取るとかいふことがなく、皆が同じやうに分けて食べるのです。

私は時々お土産物をもつて行つてやることがあるのですが、そんな時一人の子供に皆やつても決して一人で食べるやうなことはしないのです。それを皆に同じやうに分けたあとでなければ、決して食べません。ほんたうにそれを見てゐると可愛らしくなります。どんな小さい子供だつて決して他人のものを取つて食べるやうなことをしません。

一三　落葉

島崎藤村[一]

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雜木林や平坦な耕地の多い武藏野へくる冬、淺々とした感じのよい都會の霜、さういふものを見慣れてゐる君に、[二]この山の上の霜をお目にかけたい。ここの桑畑へ三度か四度もあの霜が來て見給へ。桑の葉は忽ち縮み上がつて燒け焦げたやうになる。畑の土はぼろぼろに爛れてしまふ。見ても恐ろしい猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへゆくと、雪の方はまだしも感じが柔らかい。降り積る雪は寧ろ平和な感じを抱かせる。

(一)詩人。小說家。名は春樹。明治五年長野縣に生まれた。藤村詩集及び家。春。嵐等の著がある。

(二)長野縣小諸町。

十月の末の或朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨の爲に色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ落ちるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜の爲に燒け損はれたり縮れたりはしないが、朝日があたつてきて霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで、脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めてゐたくらゐだ。そしてその朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

十一月に入つて急に寒さを增した。[一]天長節の朝、起きだして見ると一面に霜が來てゐて、桑畑も野菜畑も家々の屋根も、皆白く見わたされる。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋もれるばかりであつた。風はすこしもない。それ

(一)明治の天長節十一月三日。

かざす

でゐて一葉二葉づつ靜かに地へ落ちる。屋根の上の方で鳴く雀もいつもよりは高く勇ましさうに聞えた。空はどんよりとして、霧の爲に全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた兩手をかざしたくなつた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも恐しい冬の近よつてくることを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、殆ど五箇月の冬を過ごさねばならぬ。その長い冬籠りの用意をせねばならぬ。

木枯が吹いて來た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せてくるやうな音に驚かされて眼が覺めた。空を通る風の音

(一)長野縣南佐久郡の山中より發して、新潟に入つて信濃川となる。
(二)小諸義塾。
(三)Flannel.

だ。時々それが鎭まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向の障子にはばらばらと木の葉のあたる音がして、その間には千曲川(一)の川音も平素から見るとずつと近く聞えた。

障子をあけると、木の葉は部屋の内までも舞込んでくる。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流のところに立つ柳などは烈風に吹かれて髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑畑に茶褐色に殘つた霜葉なども左右に吹き靡いてゐた。

その日私は學校(二)の往きと還りとに、停車場前の通りを横切つて眞綿帽子やフランネル(三)布で頭を包んだ男だの、

手拭を冠つて兩手を袖に隱した女だのの行き過ぎるのに遇つた。往來の人々はいづれも鼻汁を啜つたり、眼縁を紅くしたり、或は涙を流したりして、顏色は白つぽく、頰、耳、鼻の先だけは赤くなつて、身を縮め頭をかゞめて寒さうに歩いてゐた。風を背にした人は飛ぶやうで、風に向かつて行く人は力を出して物を押すやうに見えた。

土も岩も人の皮膚の色も私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹きまくる光景は、凄まじく烈しくまた勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹も動搖し、柳、竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に殘つたのは吹落された。梅、李、

櫻、欅、銀杏などの落葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこに集つた落葉が風に吹かれては舞ひ揚つた。急に山々の景色は寂しく明るくなつた。

一四 小さい旅人

薄田泣菫(一)

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けてくると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹(さを)になれ。
棹になつたら鉤(かぎ)になれ。

(一)詩人。隨筆作家。大阪毎日新聞社客員。名は淳介。明治十年岡山縣に生まれた。泣菫詩集及び隨筆として茶話、太陽讚頌、等の著がある。

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よくよく人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

　その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えてくるあの小さい旅人の、あわたゞしい旅を考へて、いつもいはうやうのない寂しい旅心地を覺える。

　まづ百舌がくる。秋の彼岸が過ぎて、そろそろ日影が黃

矮小

（櫟）

（楡）

色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。「あゝ、もう秋だな。」と思はず振反つて見ると、矮小なくぬぎにまじつて、ずばぬけて背の高いにれの木に百舌が一羽止つて、黃色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきらきらしてゐるのが見える。私たちはその瞬間、いはうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

百舌

(鶲)

(隻)

(韮)

次にはひたきがくる。山家の午過、だるさうなきりぎりすの聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底にどこやらやつれた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて來て、なんの音ともわからない。すると樹蔭のにら畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顏を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして、逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。

ひたき

ひたきといつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに大抵は連にはなれてたゞ一人で出てくる。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をしてさゝやくやうな聲で唄ひだす。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

ひたきが來てものの十日と經たぬ間に、四十雀(しじふから)がくる。この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んでくる。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもするやうに細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこ

もんどり打つ
ませた身振

らの木立におりるなり、眩しいほどすばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある

しじふから

圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしやべりつづける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませ

きさく
（鷦鷯）

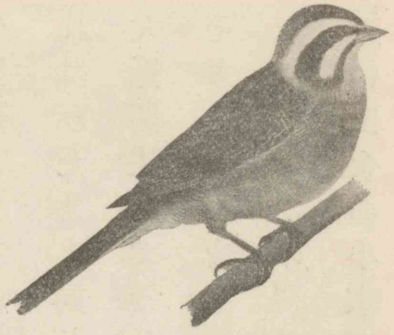
た身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育のすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいがくる。これはひたきと同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにしてくる。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんは火燵に潛りこんで、こくり、こくりと居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に檐につるした干菜の影が見すぼ

みそさゞい

錘

らしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影が、ちらついたりする。どうかして、絲目が切れて、睡さうな錘（つむ）の音がぱつたり止むと、こそこそと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい、ひよいと、小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと狹苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それがみそさゞいである。



頰白

みそさゞいと後先になつて頰白がくる。冷たい雨のび

しよびしよと降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

　一筆啓上つかまつる。

　子供泣かすな火の用心。

　今度は便に金十兩、

　やりたいけれど、一文もござなく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみじみと世渡のむづかしさと旅心の寂しさとを思はずにゐられない。

　後の雜木林にこんな小鳥がくる頃になると、野にはもうそろそろうづらが來、しぎがくる。

横しぶき

(一)詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生まれた。邪宗門、洗心雜話、季節の窓、その他、童謠民謠集等の著がある。

一五　水郷の黎明

北原白秋(一)

一番鶏、二番鶏、三番鶏、四番鶏、……それから水郷はほのぼのと夜明の景色になる。ここは隨分鶏の多いところだ。

この二三日降り續いたびしよびしよ雨に、到るところの眞菰がいよいよ人目に枯れ果ててゆく。さういふ小川や入江の傍には、必ず鶏の一二羽がしよぼんとしてゐる。物音もせぬ古い寂しい街の家並に、冬の日の暮方の小雨が横しぶきに吹きつけると、悉く閉めきつた腰高障子の前には、黒い鶏の四五羽がまた必ず雨よけをしにくる。さうして横に一列に並んで、その儘夜になる。さうした風情が見るから旅のあはれとなる。

瘴氣

(下)上弦の月

曉の五時半。宵の間から幸に雨はあがつたらしいが、寒さは一しほのやうである。咽喉長く鳴きかはす鶏の聲まで、暗い底の底から陰鬱な沼の瘴氣をこもらせて響く。窓の重い雨戸を手さぐりに一枚はづす。瓦には眞白く霜がおりてゐる。はづした雨戸を瓦の上に寄せかけて空を見上げるとまだ暗かつた。暗い空に鱗雲が片鱗づつ青く光つて波だつてゐる間から、細い上弦(下)の月が傾きかけてゐる。雲は迅く月の光は黃ろく、風は高くひゆうひゆうと吹いてゐる。

外へ出ると、外もまだ眞暗だ。鶏の聲が四方にする。きび

水門ハ水ノ門

しい霜柱をさくさくと踏んで、田圃の道を川の方に行つて見る。川は暗くてわからないが、下手へ行くと、水門には一枚の板が渡してある。その板橋も霜がおりて眞白だ。その橋の上に立つてゐると、まだ暗い河風の空を黒い羅紗をこするやうな雁の羽音が掠めて行く。雁は姿を見せないが、枯れ枯れの眞菰のそよぎも目醒めてくる。水門の下から二三人乗つた渡舟が棹をさして出かゝると誰やら寒い嚔をした。

潮來の村（相田直彦筆）

水の面もまだ暗い。それに向う岸の森のかげがこんもりと黒く映つて、その間にほんのり夢のやうに向う岸の水門が見える。黎明の風が冷たく吹出した。私の兩耳はちぎれさうになる。

寒い波の音、枯れた眞菰のそよぎ、さうしてまた黒羅紗をこするやうな雁の羽音。

街の方では鷄の聲がする。

六時、四邊やゝ薄ら明るくなりだした。河風は冷たし耳は痛し、またさつきの一本道を街の方へ引返す。途中の板橋が白く見える。その霜の上に俥の轍が二筋走つてゐる。べたべたと踏みつけた人の足跡もある。小堀の捨小舟も

荷足船

眞白だ。枯田の刈株も眞白だ。それが四五艘、どれもどれも俵を積んでゐる。俵も眞白だ。

やがてほのぼのと空も明けかゝつて來た。向う岸の森や人家が次第にはつきりとなる。白い向うの水門もいよいよおちついてくる。

見てゐると下手から青い俵を積んだ荷足船が一艘帆をかけて上つてくる。遠くで汽笛の音がする。

上手も下手も冬枯の眞菰の色が一しほさびしく寒い霧の下から現れて來た。河波の音が、ぢやつぶん、ぢやつぶん、それにさはる。

さうしてあちらこちらではいよいよ鷄が長鳴をする。

どうも鷄の多いところだ。

旅に來て見知らぬ里の夜明を何といふことなしにそぞろ歩きしながら待つ寂しさ、またその珍しさ。

一本道を宿の前まで行つて突き當つて右へ折れると、やはり小堀つゞきになつてゐる。ここの景色もまた格別眞白だ。小さい入江のほとりに一本の枝垂柳が霜をかぶつてゐる。その下に空船が一二艘、それも眞白になつて落着いた墨繪の氣持を出してゐる。長閑な冬の長閑なこの心持。冬は全くここに結晶してゐる。

左手には白い土藏が一つ、その裏にはすがれた桑の木畑がある。その桑の木の枝で雀が一所懸命聲をたててゐ

た。たつた一羽だが、ずゐぶん思ひ切つて高音を出したものだ。姿は見なかつたが、これが今朝聞いた一ばん最初の雀の聲だ。

また左へ曲ると、小路になつてゐる。薪屋の廂まで積上げた薪の間から、雀がぽうつと三四羽飛出した。勢のいい雀、羽ばたく雀の大きさ、これが今朝見る一ばん最初の雀の姿である。

雁の聲がする。空をふり仰ぐと明けかゝつた冷たい冬の高空を、小さい雁の列が山形になつて飛んで行くところだ。ついその下に桐の枯木の鶸茶色の蕾が鈴なりになつてゐる。ちやうど櫨の實のやうだが、またとなく上品な

ものだ。これは何かの圖案になると眺めた。

いよいよ夜は明けはなれて、虔しい午前の氣持になる。

いろんな鳥の聲がしだした。

桔橰の音がしきりにしだした。

人間の聲がしだした。

私も立上つて、思ふ存分爽かな朝の空氣を吸ひ込んで見た。さうして深い呼吸のあとに、兩手で思ひ切り體操のまねをして見る。

いよいよ古いこの水郷が夜から目醒めて來た。さうして裏の天王様の笹藪では一ばんおしまひの鷄が長く長く咽喉を曳いて、やがて、けけつこつこつこつと鳴き收めた。

一六　田園の曙

白鳥省吾(一)

薔薇色の曙の
清々しい空氣を傳うて
丘の上の鐘が鳴る
目覺めよ、そして働け！

收穫のあとの田畑に
霜柱は堅く結んでゐるが
土に生くる農村の人々の
鼓動はいつも若々しい。

年毎に繰返される穀物の燿き

(一)詩人。明治二十三年宮城縣に生まれた。大地の夢、日時計等の外童話集、評論集等の著がある。

少年が青年となり主人となり
田園の美しい舞臺。

土は冬でも休んでゐるのではない
土は更に種を蒔かれることを準備し、
農民は冬でも休んでゐるのではない、
糧のために――籾ひく唄を聽け
靈のために――書を讀むを見よ
彼等は樂しい朝夕を持つ。

(一)小說家。文學博士。名は成行。慶應三年東京に生まれた。五重塔。洗心廣錄。平將門等の著がある。

自己の最良を盡くす

公正

一七　努力と奮闘と嗜好

幸田露伴(一)

人間の所爲は隨分多數に分類することができる。そして、その所爲の價値には幾千となく階級もあらうが、努力は確かにその高貴な部分に屬するものである。奮闘といふ言葉は、努力とやゝ近似の意味を表してゐるが、これは假想の敵があるやうな場合に適當するもので、努力は我が敵の有無に拘らず、自己の最良を盡くして、或事に奮勵する意味で、奮闘といふ意味が有する感情、意義よりは高大で、公正で、明白で、人間の眞面目な意義を發揮してゐる。

元來一切の世界の文明は、この努力の二字に根ざして、そこから芽を發し、枝をつけ、葉を生じ、花を開くのであるといはねばならぬ。

嗜好

並行線的

同一線的

然し、努力に比して、その相手のやうに見えるものがある。それは嗜好、卽ち好んでなすといふことである。努力は厭なことをも忍んでなし、苦しい思にも堪へて勞に服し、事に當るといふ意味であるが、嗜好といふ場合は、苦しいこともうち忘れ、厭ふといふ感情も全くなくて、卽ち意志と感情とが並行線的、若しくは同一線的に働いてゐる場合をいふのである。努力はそれとやゝ違つた意味を有してゐる場合で、意志と感情とが相忤し、戻つてゐる場合でも、意識の火を燃立たせて、感情の水に負けぬやうになし、そして、熱して

俊秀＝すぐれてひいでる
德澤＝おかげ

已まぬのをいふ。

或人が或事に從事し、そして、その人が我知らず自己の全力をそこに沒して事に當るといふ場合、それは努力といふよりは、好んでなすといつた方が適當である。そこで、世界の文明は努力から生じてゐるか、好んでこれをなすところから生じてゐるかといへば、努力から生じてゐる如く見える場合も、嗜好から生じてゐるが如く見える場合もある。例へば、文明の恩人、卽ち各時代の俊秀な人物が、或事業の爲に働いて、その德澤を後世に遺した場合を考へて見るに、努力の結果の如く見える場合もあり、また好んでなした結果の如く見える場合もある。これは人々の

(一) Palissy. フランスの人。各種の色彩模樣を陶器に應用した。(西暦一五〇九年—一五八九年)

(二) Columbus. イタリーの人。(西暦一四三六年—一五〇六年)

觀察、解釋、批評のし方に因つてどちらにも取れるが、正當に解釋して見たならば、好んでなす場合にも、努力が伴ないぬ時は、その進行を廢絶せざるを得ない。然らずとするも、偉大な結果を期することはできない。(一)パリッシーの陶器製造に於けるも、(二)コロンブスの新地發見に於けるも、皆さうである。いかに好んでなすといつても、例へば、有福な人が園藝に從事する場合についても、或時は確かにそれは苦痛を感ぜ

新地發見

しめる。卽ち手數、緻密な觀察、時間的不規律な勞動に服する等の種々な場合に、努力によらなければ、中途で止むの狀態に立至ることもまゝある道理で、換言すれば、好んでなすといつても、その間に好まない事情が生ずるのは、人生にありがちな事實である。その好ましくない場合が生じた時に、自己の感情にうち克ち、その目的の遂行を專らにするのが卽ち努力である。

—努力論—

昭憲皇太后御歌

みかかすは玉の光はいてさらん
人のこゝろもかくこそあるらし

(一)小說家、本草家。名は寛。昭和二年歿、年六十五。日の出島、食道樂等の著がある。

(二)滋賀縣滋賀郡滋賀村の山。

櫻狩

霏々

滿目蕭條

(三)(四)(五)唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪いづれも八景の一。

一八　近江聖人の幼時

村井弦齋(一)

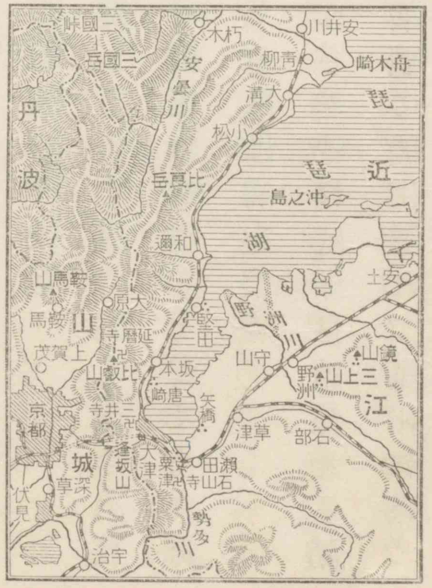
雪ならば幾たび袖を拂はまし
はなの吹雪の滋賀(二)のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏霏たる雪は路を沒し、凜冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山をうち越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景辛崎(三)の松は暮靄朦朧の間に隠れて、堅田(四)に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。見わたせば白雪皚々たる比良(五)の雪、今よりこの山路にかゝらば、山中にて日は暮れ

(一)滋賀郡。
(二)滋賀縣高島郡小川村。

ん。疲れし足の進み難きに、坂本(一)の邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、「かの山を越ゆればわが故郷(二)、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくここに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いでいで心を取直し、今宵の中にこの山を越えんものを。」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそはかゝりけれ。



彌增す寒さ

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりたどりて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂寞として、耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下滑る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かにもの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難所と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅慣れぬ身の悲し

さ、足に任せてこの深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せるものの如く、松の根方にうち倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身にしみわたり、眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲もうち忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向かひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけり。この家には我に優しき老人ありきなどと、昔

進退谷る

のことを想ひ出でて、すゞろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり。築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延して、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられしことな

須臾

衡門

脩竹

和郎

き母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き「母様、私が汲みませう。」と、涙ながらに取りすがる。

事の不意なるに母は驚きて振返り「誰か。藤太郎。どうしてここへ。」藤太郎は細き聲「はい、母様の御手助をいたしに參りました。まづ内へお入りあそばせ。おつむりに雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か。」「いえ、一人でございます。」母は聲を勵まし「叔父様が一人和郎をお出しなされたか。」「い

眉を揚ぐ

え、叔父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ「怪しからぬ。何故そんなことを。さあお話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえ、ここで聞きませう。聞かないうちは、めつたに家へは入れません。」さつと吹きくる朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔をうつ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、すゞろ涙に咽せびしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して中途で歸るなと、あれほど堅く言聞かせたことを忘れましたか。この母が難儀を忍

(一)愛媛縣喜多郡・

默然

ぶのも、たゞ和郎を立派なものにしたいばかり。立派なものにならないで、家にゐて手助をしてくれたとて、なんのそれがうれしからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひません。その足ですぐ大(一)洲へお歸りなさい。」

　餘りのことに藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて、雪の上に跪きぬ。母はその失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ちかくまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂きことも、つらきことも多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして

なまなかに

聲を呑む

(皸)

また思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔。獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母のいふことがわかりませんか。」と強くは叱れど、聲はうるみぬ。藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて「はい、わかりました。」「それなら今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲「はい、歸ります。」と素直にいふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞らるゝ思。遂に堪へかねて忍泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。「母樣、この藥はあかぎれの妙藥で、世にも得難き品。これ差上げたいとわざわざ持つて參りましたもの。これだけはお取りなされて下され。」と、途中にて得し藥を差出す。

路悠々

母は快く「おゝ和郎の志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。

母は耻づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く泣く我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

――近江聖人――

(一)俳人、歌人。名は常規。伊豫の人。明治三十五年歿、年三十六。その俳句、短歌、隨筆等の夥しい著作は、今、子規全集(十五卷)に收められてゐる。

一九　新年雜記

正岡子規(一)

去年の正月と今年の正月と、自分に格別違つたこともないが、少し違つたのは、からだが餘計に弱つたと思ふこと、元日の蜜柑の食ひやうが少なかつたことと、年賀のはがきが意外に澤山來たことと、病室の南側を硝子障子にしたことと位である。硝子障子にしたのは、寒氣を防ぐ爲が第一で、第二にはゐながら外の景色を見る爲であつた。果して暖い。果して見える。見えるも見えるも、庭の松の木も見える。杉垣も見える。物干竿も見える。物干竿に足袋のぶらさげてあるのも見える。その下の枯菊、水仙、小松菜

あさる

の二葉に霜のおいてゐるのも見える。庭に出してある鳥籠も見える。籠の鳥が餌を食ふのも見える。雀が松の木をあちらこちらするのも見えるが、四五羽連立つて枯木へ來たと思ふと、すぐにまたはらはらと飛んでしまふのも見える。

鶯が一羽默つて屋根をあさりながら、ふいふいと飛廻るのも見える。向うの屋根も見える。上野の森も見える。凍つたやうな雲も見える。鳶の舞つてゐるのも見える。四角な紙鳶と奴紙鳶と二つ揚つてゐるのも見える。四角な紙鳶がめんくらつて屋根の上に落ちたのも見える。それを下から引張るので、紙鳶が鬼瓦にかゝつてうなづいてゐ

るのも見える。殊に雪の景色は今年つくづくと見た。山吹の枝に雪の積んだのが面白いといふことも、今年知つた。

然しこれ等は硝子障子についてほゞ豫想したことであつたが、その外に豫想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びることである。眞晝近き冬の日が、六疊の奥までさしこむので、その中に寢てゐるのが暖いばかりでなく非常に愉快になつて、遂には起きて坐つて見るやうになる。

この時は病氣といふ感じが全く消えてしまふ。枕もとを見ると、寒暖計は七十度近くまで上つて、福壽草の蕾は一點の黄を現して來た。

(一)小說家。英文學者。名は金之助。東京の人。大正五年歿。年五十。漾虛集。草枕。明暗等の著がある。

膠着　ねばりつくこと。

自修文

猫と雜煮餅

夏目漱石(一)

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色の椀の底に膠着してゐる。白狀するが餅といふものは今迄一度も口に入れたことがない。見るとうまさうにもあるし、また少しは氣味がわるくもある。前足で、上にかゝつてゐる菜つ葉を搔き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引掛つてねばねばする。嗅いで見ると、釜の底の飯を御櫃へ移す時のやうな香りがする。食はうかな、やめやうかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もゐない。おさんは暮も春も同じやうな顏をして羽根をついてゐる。子供は奧座敷で「何と仰つしやる兎さん」を歌つてゐる。食ふとすれば今だ。もしこの機をはづすと來年迄は餅といふものの味を知らずに暮してしまはねばならぬ。我が輩はこの刹那に猫ながら一

躊躇　ためらふ。

の眞理を感得した「得難き機會はすべての動物をして、好まざることをも敢てせしむ。」

實をいふと我が輩はそんなに雜煮を食ひ度くはないのである。否椀の底の樣子を熟視すればするほど、氣味が惡くなつて、食ふのが厭になつたのである。もしおさんでも勝手口を開けたなら、奧の子供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、我が輩は惜氣もなく椀を見棄てただらう。しかも雜煮のことは來年迄念頭に浮かばなかつたであらう。ところが誰も來ない。いくら躊躇してゐても誰も來ない。早く食はぬか食はぬかと催促されるやうな心持がする。我が輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か來てくれればいいと念じた。矢張り誰も來てくれない。

我が輩はたうとう雜煮を食はなければならぬ。最後にから

煩悶　おもひわづらふ。
逢着　であふ。

だ全體の重量を椀の底へ落すやうにして、あぐりと餅の角を一寸ばかり食込んだ。この位力を込めて食付いたのだから大抵なものならば嚙み切れる譯だが、驚いた、もうよからうと思つて齒を引かうとすると引けない。もう一返嚙み直さうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと勘づいた時は、既に遲かつた。沼へでも落ちた人が、足を拔かうと焦慮(あせ)る度に、ぶくぶく深く沈むやうに、嚙めば嚙むほど口が重くなる、齒が動かなくなる。齒答はあるが、齒答があるだけどうしても始末をつけることができない。この煩悶の際我が輩は覺えず第二の眞理に逢着した「すべての動物は直覺的に事物の適不適を豫知す。」

眞理は既に二つ迄發見したが餅がくつ付いてゐるので毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸收されて、拔けるやうに痛い。早く食ひ切つて逃げないとおさんがくる。子供の唱歌もやんだやうだ、きつと臺所へ驅出してくるに相違ない。煩悶の極尻尾をぐるぐる振つて見たが何等の功能もない、耳を立てたり寢かしたりしたが駄目である。考へて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寢かし損であると氣が付いたから、やめにした。やうやくのこと。これは前足の助を借りて餅を拂ひ落すに限ると考へ付いた。まづ右の方をあげて口の周圍を撫でまはす。今度は左の方を伸ばして口を中心として急激に圓を畫いて見る。そんな呪で魔は落ちない。辛抱が肝心だと思つて、左右交る交るに働かしたが矢張り依然として餅は齒の間にぶら下つてゐる。えゝ面倒だと兩足を一度に使ふ。すると不思議なことにこの時だけは後足二本で立つことができた。何だか猫でないやうな氣がする。

猫であらうがあるまいが、かうなつた日には、構ふものか、何

猫と雜煮餅(自修文)

驀地　いつさんに。わきめもふらず。
天祐　神のたすけ。
氣配　やうす
躍起　いらだつこと。

でも餅の魔が落ちる迄やるべしといふ意氣込で、無茶苦茶に顏中引掻き廻す。前足の運動が猛烈なので、やゝもすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にゐる譯にもゆかんので、臺所中あちらこちらを飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つてゐられたものだと思ふ。第三の眞理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能はざるところのものをなし能ふ。これを天祐といふ。」

幸に天祐を享けたる我が輩が一所懸命餅の魔と戰つてゐると、何だか足音がして奥より人がくるやうな氣配である。ここで人に來られては大變だと思つて、愈々躍起となつて臺所を駈廻る。足音はだんだん近付いてくる。あゝ殘念だが天祐が少し足りない。たうとう子供に見付けられた。「あら猫が御雜

（一）「狂瀾を既倒にめぐらす」（韓愈の進學解）形勢のくつがへつたのを再びもとによりかへすこと。

煮を食べて踊を踊つてゐる。」と大きな聲をする。この聲を第一に聞きつけたのがおさんである。羽根も羽子板も打遣つて勝手から「あらまあ」と飛込んでくる。細君は縮緬の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書齋から出て來て「この馬鹿野郎」といつた。面白い面白いといふのは子供ばかりである。さうしてみんな申し合はせたやうにげらげら笑つてゐる。

腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる譯にゆかぬ。弱つた、漸く笑ひがやみさうになつたら、五つになる女の子が「おかあ樣猫も隨分ね」といつたので（一）狂瀾を既倒に何とかするといふ勢でまた大變に笑はれた。人間の同情に乏しい事實も大分見聞したが、この時ほど恨めしく感じたことはなかつた。遂に天祐もどつかへ消え失せて在來の通り四つ這になつて眼を白黑するの醜態を演ずる迄に閉口した。

さすが見殺しにするのも氣の毒と見えて「まあ餅をとつて遣れ」と主人がおさんに命ずる。おさんはもつと踊らせようぢやありませんかといふ眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺して迄見る氣はないのでだまつてゐる。「取つてやらんと死んでしまふ、早くとつて遣れ」と主人は再び下女を顧る。おさんは御馳走を半分食べかけた夢から起された時のやうに、氣のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。どうも痛いの痛くないのつて、餅の中へ堅く食ひ込んでゐる齒を情け容赦もなく引張るのだから堪らない。我が輩が「すべての安樂は困苦を通ぜざるべからず」といふ第四の眞理を經驗して、けろけろとあたりを見廻して時には家人は既に奥座敷へ這入つてしまつて居つた。

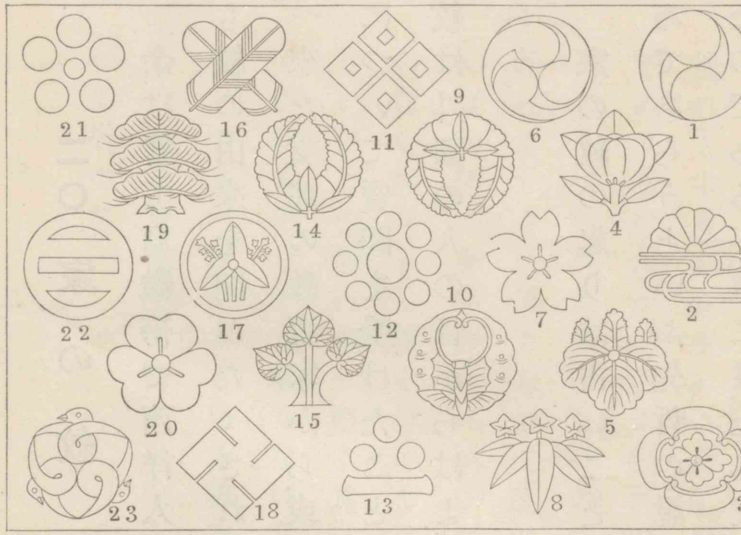
先哲

二〇　家の紋

余は曾て羽織袴で西洋人の饗宴に招かれた時、主人から紋の由來を問ひたゞされたことがある。また先年日本へ來た支那の敎育家から、或所の宴會で、同じく紋の起原について質問を受けたことがある。日本服の三つ紋、五つ紋は、外國の人の目からは、よほど不思議に見えるのであらう。

家の紋の起りは古いことではない。大凡鎌倉以後ぐらゐであらうといふ先哲の說がある。元は旗、幕などに附けたのであるが、後には、だんだん素袍直垂、小袖などにも附

徽號＝しるし
冠婚葬祭＝元服、結婚、葬儀、祭祀



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
二ツ巴	菊水	木瓜(モクカウ)	橘	五七桐	三ツ巴	櫻、	笹龍膽(サリンダウ)	下り藤	備前蝶	四ツ目	九曜	三ツ星一字	上り藤	立葵	ちがひ鷹	丸に澤瀉(オモダカ)	角立萬字	三がい松	かたばみ	星梅鉢	丸に二ツ引	結び三ツ雁金

けるやうになり、自らその家の徽號となり、後には冠婚葬祭の禮式の時には、必ず紋章の附いた着物を着ることになつた。今日では大禮服を初めとして、通常禮服としては燕尾服を用

ひ、通常服としてフロックコートを用ひるなど、洋服を本として禮裝を定められたから、公の禮服には日本服を着る場合はないが、民間の交際では、紋のある羽織または小袖は、自ら禮服のやうになつてゐる。

家紋の發達は武家以來のことであつて、武士道と共に益〻發達したに違ひない。由來家系を重んずるのは我が國古來の風であつて、武家時代にはその風が殊に盛んであつたから、その家紋によつて先祖の事蹟を忘れず、先祖傳來の家の名を墜すまいといふ考があつたのである。それ故昔は家の紋を改めるのは、なかなかやかましくて、猥りに變へてはならぬことになつて居つた。

四民平等
後裔

四民平等の今となつては、昔の武士の後裔ばかりではなく、誰でも家紋を附けるやうになり、新しく紋所を工夫したのも多からうと思ふ。今日の世の中は家祿の制もなく、隨つて家紋を重んずる心も昔のやうではないが、我が日本では家が社會の根本であることを思へば、また舊來の家の紋所を貴ぶ心を忘れてはならぬ。家の紋を貴ぶといふことは、つまりはその祖先を忘れぬといふことである。

二一 朗詠

春

東岸西岸の柳遲速同じからず、
南枝北枝の梅開落已に異なり。

夏

池冷やかにして、水に三伏の夏なく、
松高うして、風に一聲の秋あり。

秋

秋水漲り來りて、船の去ること速く、
夜雲收り盡きて、月の行くこと遲し。

冬

寒流月を帶びて、澄めること鏡の如く、
夕吹霜に和して、利きこと刀に似たり。

旅

孤館にやどる時、風は雨を帶び、

遠帆のかへる所、水は雲に連なる。

祝

長生殿の裏には春秋に富み、
不老門の前には日月遲し。

×

二三　靜かな春

生田春月[一]

この都會では正月を過すと、春はいつでも町の花屋の花から訪れてくる。

ことしも桃色にふつくり咲いたつゝじの切花が、私の家の竹の緣に、小さい壺に挿されて置かれてから、もう十二三日くらゐもたつであらうか。

(一)詩人・小說家・名は清平・明治二十五年鳥取縣に生まれた。小說相寄る魂、靈魂の秋等の外、日本民謡集等の著がある。

この間に一度雪が降つたので、その雪どけの寒さの中で、冷え冷えとその桃色の花が忍んで咲いてゐるのを見る每に、私の口には自ら「春遠からじ……春遠からじ……」との句が、慰めるやうにのぼつてくるのであつた。

あゝ春。ほんたうに懷かしい春。新しい爽かな袷を着ることもできるし、色あせた冬の外套を輕い外套に取替へることもできるし、青い青い麥の畑を車窓から眺めながら、美しい川の流の上の鐵橋を渡る汽車に乘ることもできるし、どこかの山里に近い溫泉宿で、ぶらぶらと二三日を屈託もなしに過すこともできる。なんと思ひ浮かべても、樂しいのは春の旅ではないか。

屈託

「春し待ちなば花咲かん……」

ふとかういふ句も口に浮かんでくる。

今は事志とたがつて、不遇に暮す身にも、いつかは春はやつてくるのだ。そして、花の咲く日もあるのだ。

今に春がくる。今に花も咲く。かう思ひつゝ、忍び難いことも忍び、むづかしいことも努力努力で耐へ忍び勤勞する人の心は、なんといつても素直なものではないか。

×

若いものにとつても、老人にとつても、それぞれの意味で春は待たれる。ひたすらに待たれる。春がくれば、貧しいものも貧しいなりに快活になり、病んでゐるものも病ん

でゐるなりに幸福に近づくのを感じ、健かなものは健かなだけに、はじけるばかりの元氣が出るのである。

この心からの春の思慕は、それがそのまゝ詩の心である。詩といふものは、もともと魂の思慕であるといつてもいいのだ。そして、その心の動きが、自分の律動にふさはしい詞を選ぶのである。

外國の書物を見ると、かういふ春への思慕が、北歐から南歐イタリーへの旅のあこがれになる。雪と氷とに埋められたロシヤやスカンディナビヤ(一)半島の方から、暗いイギリスから、灰色のカナダ(二)から、世界漫遊客が列をなして集つて行くのが、かの「ミルテ(三)の樹は靜かに、ローレル(四)は高

(一) Scandinavia.
(二) Canada.（加奈陀）
(三) Myrtle.（英）Myrte.（獨）橄欖科の喬木。
(四) Laurel.（月桂樹）

(一)Greece.（希臘）
古典的
とゞめをさす

く。」と歌はれたイタリーの青空の下である。(一)ギリシヤ、ローマの古典的な旅である。

それが日本では京都であり、奈良である。佳い春をごく少ししかもたない東京に住んでゐるものにとつては、北歐人が南歐を思ふやうに、京都、奈良を思ふ。

×

日本の春はまづ京都、奈良にとゞめをさす。菜の花が黄色に續いてゐる大和路を、寺から寺へ、村から村へとさまよふ氣持はどんなであらう。餘りの長閑さについ眠たくなつて、どこかの丘の草の上に寢こんでしまひはしないだらうか。

(一)京都市の東に連なる山々。
(二)(三)共に同市の西南方。
逸興

青いといふよりは寧ろ黒く眠つたやうな東山(一)三十六峰から、北山、西山、淀(二)、山崎(三)の山々に圍まれたあの盆地に、温かい水のやうにたゝへられた春光を浴びながら、洛中、洛外の春をたづねて名僧、隱士、美姫の遺蹟を弔ふのは、いかに心ゆく限りの逸興であらう。

東山（三輪超世筆）

春のくる毎に思ふのは京である。奈良である。

去年の春、ちやうど花も少し盛を過ぎた時分、私は京都へ行つて、古い寺々を見まはつた。そこでは、いろいろなも

のが見られたし、いろいろなことが考へられた。けれど、あんまり多くを見、多くを感じたので、感情の疲勞を來して、反つて印象がぼんやりしてしまつた。

それよりも私が忘れ難く思ふのは、洛西嵯峨(一)のあたりをさまようた一日の樂しさである。そこにも、ところどころ菜の花が青い麥畑の間を點綴して、ありとしもない風が、ほのかにそよいで過ぎる。さすがに都ばなれのした小徑を、ぶらり、ぶらりと歩いたり、たゝずんだりして行くと、行く所に何か心にさゝやきかける古代の面影が、花となり胡蝶となり、夢となり幻となつて、そゞろに懷古の情を募らせる。

——旅ゆく一人——

(一)京都府葛野郡。大井川の東岸。

ありとしもない

自修文

犬ころ

二葉亭四迷(一)

うれしいにつけ、悲しいにつけ、思ひ出すのはポチのことだ。

春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寢てしまつたが、ふと目を覺すと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかとすればすうと、或は高く、或は低く、單調ながら拍手を取つて、さながら、大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。私は夜中にめつたに目を覺したことがないから、初はびつくりしたが、よく研究して見ると、なに、父の鼾なので、やつと安心して、そのまゝ再び眠らうとしたが、どうもこれが耳について、寢附かれない。し方がないから、聞えるまゝにその音に聞入つてゐると、いつからとなく囃子の手がこんで來て、合の手に遠くで微かにきやんきやんといふやうな音が聞

(一)小說家。本名は長谷川辰之助。東京の人。明治四十二年歿。年四十六。著は浮雲、平凡等の外、飜譯が多い。

大鋸　おほがともよむ

囃子　鳴物で調子をとること。

合の手　歌と歌との間にひく音曲。

氣壓さる　いきほひにおされる。
けたゝましく　とんきやうに。
めいる　しづみこむ。
(欠伸)

える。鼾が凄じい時には、それに氣壓(けお)されて聞えぬが、鼾が低く
なると、はつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益々
耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には鼾と離
れ離れに、確かに門前に聞える。
かうなつて見ると、疑もなく小犬の鳴聲だ。時々喉でも締め
られるやうに、けたゝましく、きやんきやんと鳴立てる。その聲(こゑ)
尻(じり)がやがてだんだんに細く悲しげになつて、めいるやうに遠
い遠い所へ消えて行く。かとすれば、忽ちまた近くで堪へきれ
ぬやうに鳴出して、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎ
やおとあくびをするやうな時もある。
私はそつと夜着のなかから首を出して、「小さい犬の聲だね
え。どうしたんでせう。」とうるさく母に聞くと、母は優しく、「ど
かの人が棄てた犬だらう。」と、一々説明してくれて、「もう晩いか

ら、默(だま)つてお寢。」と、あちらを向いてしまつた。
私もまた夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、鳴聲がや
や遠くなるにつけて、父の鼾がまたうるさく耳に附く。寢られ
ぬまゝに、私は夜着のなかで棄犬の有樣を繰返し繰返し考へ
た。まづどこかの飼犬が椽の下で兒を生んだとする。ちつぽけ
な、むくむくしたのが重なり合つて、首を擡(もた)げて乳房を探して
ゐるところへ、親犬が餘所(よそ)から歸つて來て、その側へどさりと
横になり、片端から抱へこんでなめると、小さいから、舌の先で
たわいもなくころころと轉がされる。轉がされては大騷して
起返り、またよちよちとはつて、ぼつちりと黒い鼻づらで、お腹(なか)
を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてて吸附い
て、小さい兩手で揉立て揉立て吸ひだすと、甘い溫かな乳汁(ちゝ)が
出て來て、喉へ流れこみ、胸を下つて、なんともいへずおいしい。

お腹もくちくなる　滿腹になる。

と、腕の下から、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割りこんでくる。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騷をやつてみるが、たうとう取られてしまひ、またそこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も溫つて、とろけさうな好い心持になり、ついうとうととなると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわててまた吸附いて、一しきり吸ひたてるが、ぢきにまたたわいなくうとうととなつて、乳首が遂に口を脫ける。脫けるも知らずに口を開いて、小さい舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正

犬ころ（奥村木巣筆）

足搔　足の運動。

ぬれしよぼたれる　びしよぬれになる。

途方にくれる　どうしようかと方法にまよふ。

體なく寢入つてゐるところをむづとつかみ、宙につるす。驚いて目をぱつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがくうちに、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足搔が自由になると、襟元をつまゝれて、高い高い所から、どさりと落された。うろうろとして、そこらを覗きまはすけれど、なんだか變な寂しい眞暗な所で、誰もゐない。ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間にぬれしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身ぶるひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、どこからも出ては來ない。途方にくれて、よちよちとはひ出し、夜中にたゞひとり、溫かな親の乳房を慕つて悲しげに鳴きまはる聲が、さつき一度門前へ來て、またどこへかさまよつて行つたやうだつたが、それがいつかまた

戻つて來て、どこをどうもぐりこんだのか、今は鳴聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に賴んで、この小犬に食物を與へて、一晩泊めてやることにした。犬嫌ひな父は、泊めたその夜を鳴きあかされると、うんざりしてしまつた。明くる日は是非追出すといひだしたから、私は小犬を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、しかし、それも一時のことで、その中に小犬も獨寢に慣れて、夜も鳴かなくなる。追出すはずのものにいつしかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に搜すやうになつてしまつた。

——(一)二葉亭全集——

うんざりする　よわりきる。

(一)全四卷。東京朝日新聞社發行。

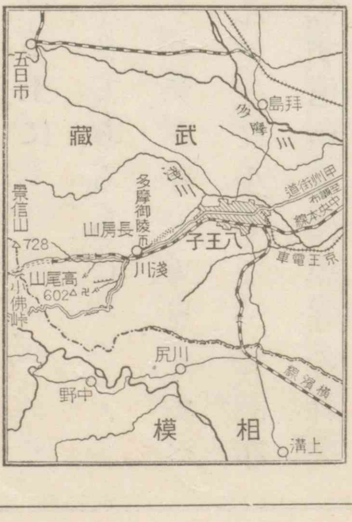
(一)歌人。京都の人。昭和三年歿、年四十一。無憂華・薰染等の著がある。
(二)昭和二年。
(三)東京府西多摩郡八王子市の西。

二三　多摩御陵參拜の記

九條武子(一)

如月(二)の春未だ淺い日曜の晝、私たちは淺川(三)の御陵參拜の爲に、道を甲州路にとつて自動車を走らせた。曇つた空は薄日もさゝず、立迷ふ雲の往來も、今日の心持に似て、何か知らず心寂しい。

甲州街道は良い道であつた。自動車は靜かに走つてゆく。過ぎてゆく沿道の村々は、春の訪れも後れて、未だ冬ごもりの寂しい色に包まれてゐた。



(一)Radio.
(二)Antenna.
(三)東京府北多摩郡調布町。町の南に多摩川が流れてゐる。

梅も咲かずまばら篁くろ土に
　春まだおそき村つゞきかな
にはつ鳥胸毛ふくらせほる土に
　草の芽いまだこもりてあるらし

青い屋根、桃色の窓、ラヂオ(一)のアンテナ(二)なども見える。ペンキを塗つた現代式住宅がだんだんに少くなつて、調布(三)の果を過ぎたあたりは、見はるかす遠い丘に鎭守の森、桑の畑など、それらが武藏野らしい昔の儘の畫幅を展げてゐるのも嬉しかつた。關西の景色に見馴れてゐる自分には、漫々たる丘陵と雜木林の多い眺は、如何にも關東らしう思へて面白く感じられる。

(一)山梨縣丹波川の下流。東京府に入つてから、荏原郡羽田町に至つて海に入る。長さ三十八里。
ほゝける
悟道

多摩川(一)はまだ冬枯の儘に、ほゝけた薄が堤に殘つてゐる。淺い流の水面には、灰色の雲が光なく移り、鼠色と茶褐色の野を、一線にくつきりと松林が劃してゐる。松には春もなく、冬もない。何時に變らぬ常磐の姿は、悟道の一境に達した人の心のやうだともいへる。

九條武子

泣いては笑ひ、求めては失ひつつ迷へる心は、咲いては散り、染めては落ちる木のたぐひでもあらうか。松節の堅きを讃美する一方には、何かしら不變といふことが却つて寂しいものののやうに思はれて、常に變化から變化を樂しんでゐる心持が考へられる。

(一)東京府南多摩郡の首都。東京市から西十一里。
(二)東京市の西部新宿から八王子市に至る電車。

道のべにふとみしことのしかすがに
心にふれて身にしむ今日は

(一)八王子市の郊外に近づけば一面の桑園である。今は知らず、昔は機織り暮らしたであらう家々の女等の仕事が、床しくもまた懐かしいものとしのばれる。

村々を通つて落ちついた眼に、市の店頭は急に華やかにうつる。新宿からの(二)京王電車は、ここまで延びてゐる。ここから淺川までは乘合自動車の便もあるが、乘客はいづれも御陵參拜の人たちであらう。何々團體、何々青年團の、紋服の者、制服の者など、お詣りの人足は、ここから淺川まで間斷なく續いてゐた。

(一)京都市の東方八瀨村から奉仕する人。
(二)秩父宮殿下。

(一)八瀨の童子がつかへまつりし、葱華輦渡御の御有樣をしのびつゝ、やがて東淺川橋を渡る。

淺川の河原の石もひとつびとつ
泣きぬれにけんみはふりの夜を

御門を通つて參道十數町の間、鯨幕引きわたされ、幾百基の高張提燈もその儘にまづ夜の儘なるもあはれみ新たに、いよよ胸閉ぢらるゝを覺える。御若き御名代の(二)宮樣が、かの寒夜を父帝の御喪主とたゝせられ、御悲みの御足どりも重う進ませられたであらう淨き玉砂利の道は、今は一日幾萬を數へる國民の參拜の群に踏固められてゐる。第二の御門の左側にある參集所にて姓名を通じ、そこ

庭燎

で手を清め口をすゝぎ、守部の人にみちびかれて、御柵内に參進する。御幕の内には、近衞の兵士が、御靈を御守りまゐらせてゐた。霜さゆる曉かけて焚かれた庭燎のあとを見るにつけても、紅に燃ゆる大かがり火、遠く奉悼の弔音をこめて鳴りわたる百八聲の梵鐘の響、その夜は如何に森嚴な御事であつたらうと偲ばれる。御鳥居近く數步の前に參進して、ここに誠をこめて拜し奉る。先帝の御靈とこしへに神鎭り給ふ大前とて、おほけなさに自ら頭を垂れて、ひたすらに心からの合掌を捧ぐるのみであつた。

　みさゝぎのほとりま近うおほけなく
　　をろがみまつる今日のかしこさ

大まへの淸らかな砂を踏む足音も、神域にはゞかりある心地して、もとの參集所まで退いた。然しこの儘おいとま申し上げることは、何となく御名殘が惜まれて、今度は一般參拜の人たちの列に入つて拜觀した。

大前の左側に葱華輦が安置されてゐた。

　にび色のたれ帛おもしみすぬちの
　　大みひつぎをしぬびまつるも

　八瀨のわらべ幸こそありけれいやはての
　　みともつかへぬ民多きなかに

先に拜した御鳥居、祭場殿を、なほもしみじみと拜し奉れば、そこには日像纛旛、月像纛旛を兩側に、鉦、鼓、御弓、大眞

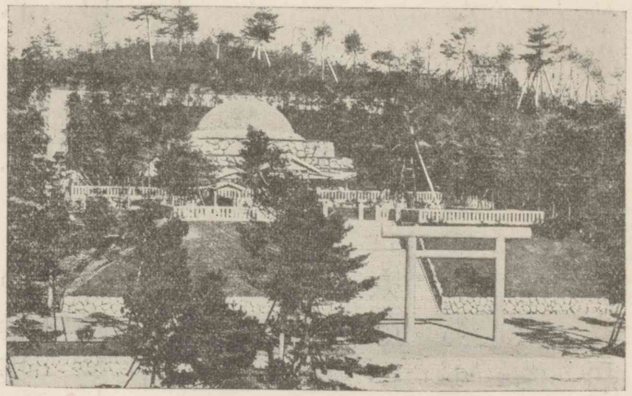
(一)Incline.

玄宮

(二)南多摩郡淺川村。

榊も奉られてあつた。祭官はここに日供を御供へ申し上げるのであらう。

日のみ旛月のみ旛の
並びたてり祭場殿の
その夜をしおもふ



多摩御陵

靈柩をあげまゐらせたインク(一)ラインも、今はきれいに芝生をもつて蔽はれてゐた。その高い上に、玄宮は半ば半月形に仰がれる。御須屋の扉は堅く鎖されて、御靈は永劫に長房山(二)の丘に御安らけく鎮まりますのであつた。

短き私たちの生涯に於て大君の永劫(とは)の大御幸を二度までも送り奉ることは、何にたとへやうもない悲しき極みである。泣いても泣いても泣切れぬ奉悼の裡に、しみじみとしのび奉るは、量りなき御恩徳である。私たちは、御恩徳に對し奉り、たゞ報謝の誠を捧ぐるのみである。御詔の御示し給ふ儘に、新帝の良き民として仕へ奉り、輝く日本の建設に努力するより外に、私たちの進むべき道はない。御陵の御前に、仰ぎては伏し、われも人も暫しは跪き佇んでゐた。

櫟の雑木林は默して立ち、夕べ近き淺川の里は、靜かに喪にこもつてゐるやうであつた。冬枯れの武藏野もやが

（一）評論家。名は大圓。明治八年新潟縣に生まれた。「惡戰」「廣長舌」「一休和尙」等の著がある。
哲人
（二）推古天皇の御甥。
鴻業
（三）推古天皇の十二年四月。
基調
闡明す
（四）推古天皇の十一年十二月。

て訪れる春の光に蘇り、小鳥等もまた御陵のほとりに可憐な挽歌を捧げまゐらすことであらう。

——無憂華——

二四　哲人聖德皇太子

高島米峰（一）

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子（二）を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡くすところでないが、憲法十七條（三）を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要を認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して建國の精神を振作し、また官位（四）

人材登用
閥族跳梁
（一）第三十三代。
（二）滋賀縣滋賀郡小野村にゐたので小野と稱する。

十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目はここに全く一變するに至つたのである。啻にそればかりでなく、當時世界の最大强國として、最も文化の進化した支那——支那は恐らく日本をその屬國ぐらゐにしか考へてゐなかつたであらうほど、それほど日本の世界的地位は低いものであつた。——と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大性の、いかに驚くべきものであるかを看取せしめられるのである。

聖德太子は推古天皇（一）の十五年に遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子（二）が使節に任ぜられて、その年七月に

(一)支那に於ける國號。

出發した。この年は隋(一)の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那はみづから中國を以て任じ、東夷南蠻西戎北狄と、四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本の如きも、所謂東夷の中の一ぐらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等な禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのであるが、然し、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化

(一)淀川の河口。
(二)磯城郡。今三輪村大字金屋の中。

を持ち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、裴世清といふものを使者として我が國に遣すこととなり、裴世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使裴世清の報告が、日本を隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の江口(一)に迎へさせ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市(二)の

衢に迎へ、天皇の詔を賜ふ時には、有司百官が定められた冠位に隨つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの裴世清もすつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣すこととなり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、裴世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならないことになり、隨つて支那は、日本を完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に、聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現

金甌無缺

したのであつて、我が國が金甌無缺な國體を維持して今日に至り、更にその天壤と共に窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歷史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、暦法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最も華やかなものは即ち日隋對等な國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讃歎し奉る所以なのである。

攝政

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせ

聖德太子 和田英作筆

られた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかも、その中のお二方が、皆二十代の青年でこの大任を帶び給うたといふことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その所謂攝政皇太子の御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明(一)天皇の攝政皇太子中大兄皇子(二)、大正天皇の攝政皇太子裕仁親王殿下(三)にましまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳の時に、そして、私たちの景仰し奉る今上陛下は二十一歳の御時に、攝政の大任を帶びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が內に充實し外に躍進したといふ事實から考へ

龜鑑

(一)第三十七代。
(二)舒明天皇の皇子。
(三)今上陛下。

聰明英邁

(一)思想評論家。名は猪一郎。文久三年（二五二三年）肥後國に生まれた。國民叢書。靜思餘錄。蘇峰文選。吉田松陰。近世日本國民史等の著がある。

功科表

經典

合はせて、先の攝政皇太子であらせられた我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威德によつて、昭和の日本は更に一段と內に充實し外に躍進すべきことを、確信せざるを得ないのである。

二五 國史に返れ

德富蘇峰(一)

「國史に返れ。」日本國の歷史は大和民族の系圖である。吾人祖先の功科表である。日本帝國の寶庫である。日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實な案內者である。信賴すべき指導者である。

干渉
體面
把持

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。然し、歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、しかして丙國と甲國ともまた同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、始めて獨立國の意義が完うされる。獨立國の本義は、形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳かにいへば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

緩急の際

我が大和民族の誇は日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しいこと善いことのみが滿ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべきことのみが溢れてはゐない。人間は決して神樣ではない。人間の所作にはさまざまな過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括していへば、日本の歴史は決して大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。

いかに日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。いかに日本の國民が、その一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史がその證人である。いか

剴切

(一)明治元年三月十四日明治天皇が紫宸殿で神々に誓はせられた新政の方針五個條。

(二)明治二十二年二月十一日發布。

乾燥無味

固陋頑冥

詭激狂妄

架空浮誇

閑却

に大和民族の中に世界的偉人と比較して一歩も劣らぬもの、卽ち彼自身また世界的偉人と稱するに足るものを生じたかは、長い年代の中に屢〻接觸したところである。卽ち我が明治天皇の盛德大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切にこれを會得することができる。國史の背景がなかつたならば、(一)五個條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、(二)帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋頑冥な戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄な赤化主義や、架空浮誇の模倣精神や、いづれも我が國史を閑却するからして起るのである。現狀

株守

醉生夢死

を株守するのも國史を知らないが爲、現狀に不安を感ずるのも國史を知らないが爲、國民的自信力を失墜するのも國史を知らないが爲、自惚根性で醉生夢死するのも國史を知らないが爲ではないか。

「國史に返れ。」とは、すべての國民が歷史家となれといふのではない。それには專門の學者がある。たゞ日本國民として日本の歷史のその大いなる筋道を諒解せよといふのである。この歷史は精神的に於ける日本の潛在してゐる寶藏である。苟も國民的に生活し且つ活動しようとするならば、まづこの寶藏に向かつてすべてのものを求めるがよい。

(一)第九十六代。
(二)鎌倉三代將軍。賴朝の第二子。承久元年（一八七九年）甥公曉に殺された。年二十八。
(三)歌人。天慶九年（一六〇六年）歿。
(四)歌人。承平三年（一五九三年）歿、年五十七。

二六　明倫歌集より

後醍醐天皇(一)

世をさまり民安かれと祈るこそ
　わが身につきぬ思なりけれ

源實朝(二)

山はさけ海はあせなん世なりとも
　きみにふた心われあらめやも

紀貫之(三)

世の中に思あれども子をこふる
　おもひにまさるおもひなきかな

藤原兼輔(四)

ひとの親の心は闇にあらねども

(一)江戸時代の大儒。寶永二年（二三六五年）歿、年七十九。
(二)吉野朝の忠臣。肥後の人。元弘三年（一九九三年）戰死、年四十二。
(三)東山天皇に仕へて左大臣攝政となつた。
(四)白河の城主。學を好み和歌及び書に長じてゐた。文正十二年（二四八九年）歿、年七十二。

　子を思ふ道に迷ひぬるかな

伊藤仁齋(一)

みどり子を見れば涙のかずそひて
　ありしむかしぞいとどこひしき

菊地武時(二)

ふるさとに今宵ばかりの命とも
　知らでや人の我をまつらん

九條道房(三)

咲く花の梢を見ても思ひ出づる
　つらなる枝の枯れし名殘を

松平定信(四)

埋火のあたりのどかにはらからの
　まどゐせし世ぞこひしかりける

あたらしき年の始のうれしきは
　ふるき人どちあへるなりけり
藤原兼輔

世の中にうれしきものは思ふどち
　はな見てくらす心なりけり
平兼盛(一)

天地の神やかためし萬代に
　たてて動かぬ國のみはしら
村田春海(二)

我が國は天照る神の末なれば
　日の本としもいふにぞありける
藤原良經(三)

(一)歌人。正暦元年（一六五〇年）歿。

(二)國學者。文化八年（二四七一年）歿、年六十六。

(三)平安時代の人。關白兼實の子。博く衆藝に通じ和歌を善くした。建永元年（一八六六年）歿、年三十八。

(四)太政大臣、關白道長の子。承保二年（一七三五年）歿、年八十。

藤原教長(四)

神代より三くさの寶つたはりて
　とよあしはらのしるしとぞなる
藤原俊成(一)

神風や五十鈴の川のみやばしら
　いく千代すめと立て始めけん

(一)平安朝末期の歌人。千載集の撰者。元久元年（一八六四年）歿、年九十一。

改新女子國文　卷四終

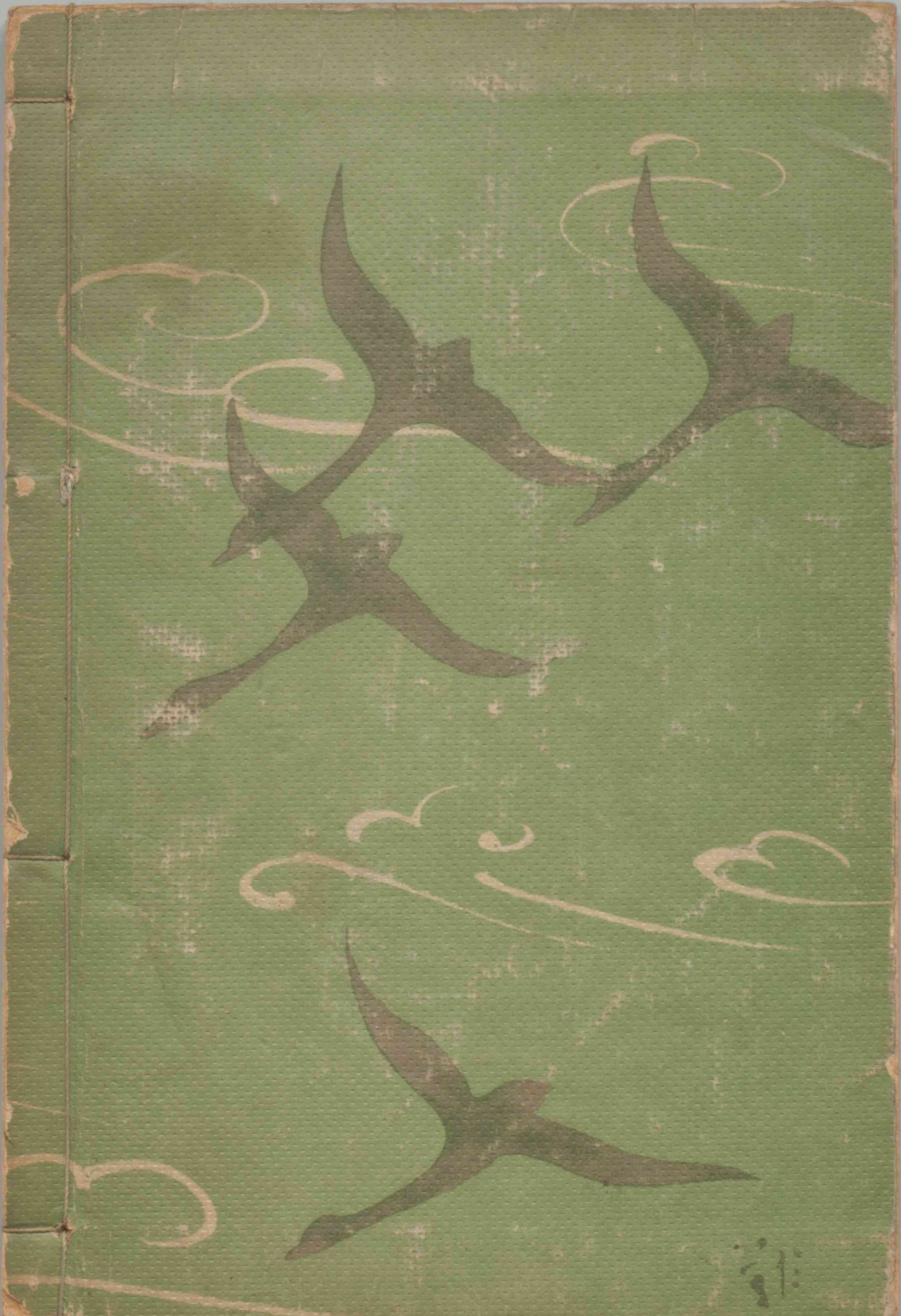
改新女子國文奥附

定價	
自卷一至卷四	各金七拾錢
卷五、六	各金六拾參錢
卷七、八	各金六拾壹錢

昭和四年九月二十五日印刷
昭和四年九月二十七日發行
昭和五年三月二十九日訂正再版印刷
昭和五年四月一日訂正再版發行

編者　芳賀矢一
訂補者　橋本進吉
發行者　東京市神田區神保町一ノ三　合資會社冨山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷者　冨山房印刷部

發行所　東京市神田區神保町一ノ三　合資會社　冨山房
電話神田代表二、二七一—二、二七六番
振替口座東京五〇一番

検印

浦野製